

家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育

第七十六卷 第五号 日本幼稚園協会

5



*Nagase*

子どもたちが一段と成長する季節です。

フレーベル新書

B6変型判

4 楽しい遊び

〈室内・園庭編〉

日本児童遊戯研究所編  
有木昭久・湯浅どんぱ共著  
500円

園舎や園庭がせまいといってなげくことはありません。特別な準備がなくても、みんなで手軽にできる楽しいゲームや遊びのアイディアがいっぱいの本です。

5 楽しい遊び

〈伝承遊戯編〉

日本児童遊戯研究所編  
有木昭久・湯浅どんぱ共著  
480円

子どもの手で育まれ、子どもから子どもへ、昔から現代へ受けつがれてきた明るく素朴な伝承遊戯を、現代っ子の感覚にマッチするよう考察を加えて紹介します。

6 楽しい遊び

〈園外編〉

日本児童遊戯研究所編  
有木昭久・湯浅どんぱ共著  
500円

遠足や園外保育の時、岩や木など手近なものを利用して、おとなも子どもも楽しく遊べるアイディアがいっぱいの、便利なハンドブックです。

7 自然物のおもちゃ

滝田要吉著

550円

葉っぱや野菜、卵などを使って、子どもたちが創る動物やおもちゃ、昔から伝わる麦わら細工や草花細工など、おとなには郷愁を、子どもには自然を発見させる楽しい自然工作集です。

新刊！

5月初旬  
発売予定



18 お話ギャラリー

滝来 敏行著・平松 尚樹画

550円

素敵なお話先生の憶い出を子どもたちに——ここには、お話のヒントをいっぱい盛り込みました。先生ご自身の語り口にあわせて、楽しく再生してください。

☆くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所・または本社営業課(03) 292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

# 幼児の教育

第七十六卷 第五号





# 幼児の教育 目 次

一 第七十六卷 五月号 一

表紙 永瀬義郎  
(永瀬とも)

カット 中島英子

人間性と人間の生活に根をおろした幼児教育を  
高橋さやか (4)

小さな幼稚園 ..... 福西基 (8)

浜田玲子 (10)

小林美代子 (12)

菊池百合 (14)

内なる自然との調和 .....  
清水美智子 (16)

★講演

閨秀画家 武村耕靄女史 ..... 勝部 真長 : (25)

ひとりひとりの子どもを見つめて ② ..... 赤羽美代子 : (28)

私の保育 ..... 太田 茂行 : (30)

子どもとの出会い

—幻視の世界— ..... 本田 和子 : (37)

チイ子 ..... 上田 貞美 : (44)

海外文献紹介 ..... (51)

保育の体験と思索

—子どもの世界の探究— (六) ..... 津守 真 : (54)

おばあんの子どものこころ 10 でんき ..... 柴岡 治子 : (62)

# 人間性と人間の生活に根をおろした幼児教育を ——幼児教育第二世紀を迎えて——

高 橋 や や か

もともと子どもの教育は、人間が人間であり、また人間となるために、人間が人間としての生活を営む、そのいとなみの維持と継承のために、——ためにというよりも継承それ自身にはかならないとなみとして、なされるはずのものである。

「幼児教育第二世紀を迎えて」ということは、この国で、教育制度としての幼児教育、即ち、この国最初の国立の幼稚園が設立されてから百年をすぎ、百一年を迎えた、ということからいわれるようであるが、従つて、顧慮することの第一は、人間本来のいとなみが制度化された歩みの中で、どのような経過をたどり、どのような発展をしたか、そして、さらにどのような指向にもとづいて今後の歩みをもたなければならないのか、ということであろう。

制度というものは、この国では、ともすれば形骸化して内容を失う場合がかなりにしばしばである。教育制度はとりわけ

て、といえば過言になるであろうか。教育制度の中でも幼児教育の制度はことさらに、といえば、幼児教育を専門とする人間の末端に連なるものにあるまじき言をなすもの、といわれるであろうか。

限られたスペースでは、結論だけを急にのべることになるようであるが、筆者は、教育の問題が、日本的な、形式的にあまりにも整然と規格づけられた、そして、その規格が、最低標準は常に事実上の最高規準となり、基本的な意義は無視され末端的な数字合わせ、書式合わせだけを重視した、——表向きの整然と内実の悪い意味での融通自在とが、まことに平然と同居している状況で、「隆盛」であることに對して、深い憤りを抱く者である。

経済機構が複雑に発達した「文明社会」の中で、社会組織が様々な制度をもつことは結構である。しかし、制度は、人間の

いとなみをその本来の必要に基づいて円滑にするためのものであつて、人間のいとなみを規制し、さらには歪曲するようでは、意味をなさないばかりでなく、悪そのものである。

幸か不幸か、幼児教育の制度は、いささか混沌としている。

幼保二元が一応の形であるけれども、一元化問題が幼児教育の根元にふれるものとして専門家の間で重たく意識されていることはすでに久しい。事实上の一元的な教（保）育施設の試みも、意欲的な識者によつて、或いは、事業家的な着目からも、全国的にいくつか行なわれてゐる。

幼保の問題は、たしかに本質的に微妙である。……というのは、人間のいとなみの本来のあり方からいえば、保育は広義の教育に当然包括されるいとなみである。ところが、制度上の問題としてならば、幼児教育は、むしろ保育の側に包括される方が合理的であると考えられる。何故なら、教育制度を考えるとき、どうしても、総合的な生活全般にわたる発想よりも、分野別の、生活全般の中から特に抽出され、分離された「教育の面」に即した発想になることは、ある程度避けられないことであろう。しかし、乳幼児期の教育は、「教育の面」だけを生活全般の中から抽出分離して行なうことは、極めて不自然ないとみなないのである。

乳幼児の教育にかかる以上、文部省、厚生省は、セクトにかかわらず、強力な相互乗り入れ体制をとるべきである。人間の乳幼児期というものは、生活と教育とを分離することができない時期だからである。

正直な気持ちとして、第二世紀に入った、とか、新しいあけぼのを望んで、とかいつた、さわやかな、積極的なものをもや難いのである。

文部省と厚生省が強力に保育・幼児教育に関して相互乗り入れをする、といったことも絶望的である。

私立の幼稚園、保育園の経営者に、保育業者であつてはならない、といつても無駄のように思われる。

父親に、月に二回か三回、本気で子どもと遊ぶことを考えてもらいたい、といつても、母親に、目先きのことではなく、自分の虚榮心の満足ばかりでなく、一人ひとりの子ども本人の全人格を考える教育を、とよびかけても、その意味は通じないのでないか。

保育者養成機関には、保育の専門家が稀にしかかわっていない。たまにかかわっていても研究の機会が乏しいのに加えて、養成機関内の処遇や発言力は認められない場合が多い。幼児教育・保育ほど現場と理論（研究）が密着していなければ

ならない専門職も少ないので、まるで当然のように、現場は現場、理論は理論と、てんてんばらばらである。

もちろん、よい方の例外は皆無ではない。

むしろ、普遍的な実情が低迷しつづけているために、よい方の例外はそれなりに力強い働きをしている。ということを言えるかもしない。官僚の中にも「型破り」といわれる先覚者は存在しないわけでもなかろうし、業者でない教育者が尽瘁されている園もあるであろう。本当の意味でのよい父親も、よい母親もまだ絶え果てたわけではない。養成機関も、……

さあ、保育者養成機関が（筆者自身も所属しているが）一番大きな問題をかかえているのかもしれない。

ということは、やはり、子どもとは何か、人間とは何か、教育、特にその基盤はどのように据えなければならないのか、といふ理諭が、未だ確かなものとなっていない、ということにはかならないのだと考える。

保育者養成機関がしっかりと研究機関の性格と機能を具え、かつ、誠実に行き届いた子どもの生活の場としての保育・幼児教育の現場を附属施設としてもつていいことは、致命的であると考えずにはいられない。

「第二世紀に入った」幼児教育は、篤志の個人、例外的な特

殊な専門家の、熱烈ではあるが、片隅のささやかな一般に理解されない孤独ないとなみ、ではなく、確乎とした社会制度として、人間の社会生活の中にしたたかに根をはった、それ自身社会生活を支えるものであるところの、——そのような位置を占めるものでなければならないと思う。そのためには、直接の保育担当者も、当然その養成機関も、よい加減ではない専門職としての自覚（意識）と、職能とを、性格と機能とをもたなければならぬ。

明治初期から、日本の保育は欧米の先進的な成果に、それほど距離をおかないでそれを追及し、受容してきたと言えるようである。「最初の幼稚園」東京女子師範附属幼稚園のあり方を見ても、頗る（現在の短期大学）を初めとするキリスト教系の保母養成と幼稚園のあり方を見ても、その保育内容の水準は、決して低いものではなかった。普及率こそ高いとはいえないが、たかわり、明治中期以後、大正・昭和初期の一九三〇年代までの日本の保育は、恐らく、今日よりも優れていた、といえるのではないだろうか。普及率が低かった代り、専門性は今日よりも明らかに高かつた。公私を問わず、保育・幼児教育を、功利的な意味での事業と考える人間はまだ多くはなかつた。

一世紀たってみて、保育事業・幼児教育事業はまことに隆

盛、なかなかのご繁昌である。専門家のいない保育者養成機関の普及も大へんなもので、その養成機関がまた、定員の二倍を軽く越えて入学者をうけ入れ、スペシャリストには程遠い「保育者」を大量に送り出している。

繁栄の中の貧困、ということばを聞くが、幼児教育のあり様も、その最たるものではないか。

障害児教育に献身している活動家が、「差別」と戦う道の喰しさを強調しておられた。保育・幼児教育に携わる者としては、「無理解」との戦いの喰しさを訴えたい。

真実な歩みは断絶してしまったわけではない。

多くはなくとも、保育の本当のスペシャリストはこの国にも存在している。ただ、そのスペシャリストも、時に、研究と実践とのそれぞれの立場を分け持つて、相互の連繋を失いがちであることは、否定し難いうらみがある。形骸化されない制度の確立が、改めて指向されなければならないと思う。

実践を支え発展させる研究、研究を発展させ確立させる実践が、社会機構の中に、生活体制の中に、動かし難く根を下して定着するものでなければならないと思う。

その希望はもてるのであろうか。

フレーベルは、すでに、生活学習の上に遊びが成立することを熟知していた。個別的な機能訓練と集団の共同において教育がいとなまれなければならないことを指摘し、労働作業の意義も明示していた。多分に観念的な限界をもっていたことは否定できないが、今日の集団主義教育の前駆をなす考え方方がフレーベルにあったことは、ソ連の教育学界に於ても、プラグマティズムの教育哲学よりはフレーベルの人間教育の所説に、批判は加えながらも見るべきものを認めていることからも、そのようにうけとめてよいことであると思う。

人間のいとなみは、できるだけ正当にうけ繼がれ、かつ伝達されなければならない。絶望することは許されないであろう。

第二世紀を迎えて、といつても、事態は決して明るいとはいえないのは事実である。物質文明の異常な発展は、人間性を人間自身の手で侵蝕しはじめた。教育マシーンのセールスも盛んであり、オートミズムは子どもたちの間に潜在的に進行していく。人間性と人間生活に根を下した幼児教育をとり戻し確立することができなかつたら、人間は「生きること」それ自体から脱落してしまうのではないかと考えざるを得ない。

# 小 さ な 幼 稚 園



福 西 基

## 家族的なあたたかさ

登園時の八時十五分頃には、担任はみな門のところで園児を待っています。先生からかける「〇〇ちゃんおはよう」というあいさつに、子どもの元気なあいさつがかえってくる時もありますが、無言で行きすぎる恥ずかしがりやの子もいます。

先生はどの子の名も顔もわかつていいのみでなく、その子の性質も、担任がどんなに苦しんで保育にあたっているかもみんな知っています。園児とばかりではありませんで、母親との交流も同様です。クラスの母親の顔や名ばかりではありません。全園児のおかあさんとのあいさつがあり、話し合いもあります。百十九名みんな自分のクラスの子であり、母親です。先生の縁談にまで心配してくれます。

## ホンモノを図さして

人口三万弱の田園都市の中心部には、私立三園、周辺部には

## 苦難をこえた喜びの味

小さな幼稚園といつても、経営を考えねばなりません。ある

公立五園もあり、その上に公立私立の保育所が各一、無認可の幼稚園か保育所かわからぬもの二園もあるこの環境に、そんな大規模の園を考えるよりは、本質的な保育を念じた方がよいことは明らかで、私自身、ますますこの小さな幼稚園のよさを何処に求めるかの探究に、心を痛めるようになりました。

私のところでは、形式的なことよりは、子どものあそびを重視し、制約的な時間割配もなければ、教育要領の要素を無理にねらいに組み入れて保育し、達成度を競うこともあります。放任のような形をとっていますが、保育者がよい幼児観、幼児教育観をもつことと、求道の意欲があれば、不安はないと言えます。不安のあるのは母親で、それに対しては年六、七回の父母教養講座で研修してもらっています。

こんなことのできるのは、小さい幼稚園ならばこそです。

年は全園児四十五名、三クラス、園長外三名の教員ということ

もありました。現在は三歳から五歳児まで百十九名の園児を五  
クラス、園長と六名の教員で保育にあたっていますが、事務員  
とか養護教諭とかを配置する余裕もっていませんので、担任  
外一名の教員を相手に、園長は謄写の原紙がきから印刷をはじ  
め、藏書千余冊の絵本の、週二回の貸出しから修理製本にいた  
るまで、しなければなりません。

それならばクラスの定数を四十名にしてとの反論もあります  
ようが、本園はクエーカーの信仰のあかしとして、一婦人によつ  
て創立されたもので、その建学の精神——子どものうちには神  
のたまものがやどついていて、今も神はこのたまものに大いなる  
働きをくださることを信じ、まわりからお助けすることが保育  
であり、それを果たす場こそ幼稚園である、との祈りをこめて  
創立されたもので、私も一友会徒として、信仰を持って継承し  
ています。この使命を果たすためには、小数の園児のクラス、全  
体としても百名から百二十名、五クラスあたりになるわけです。  
そんなために、毎年赤字が続きますが、神は必要ならばそれ  
を満たしてくれるという恵みを体験しております。この感謝に  
加えて、思わぬ時に先生がたを喜ばしてくれる母親の自然に湧  
き出る物心両面の助けがあります。

### 悩みもあります

私共の園は五十年の歴史を持っていますが、それだけに園舎  
は古いし、現行設置基準を満たすこともできません。

教員の待遇にしても、短大卒有資格者七万三千円の初任給、  
期末手当三か月分という中卒並のものです。

幼稚園教育要領で総合的保育などについても、養成機関は  
個々バラバラの教育で、卒業するとそれだけの知識で十分であ  
ると考える探求心のない教員などがありますが略します。

### おわりに

ある席上で、他の幼稚園に子どもを通園させている公立学校  
時代の教え子が、こんな話をしてくれました。

「ある子の親が『小学校五、六年になって上位の成績にいる  
のは、『小友』の子が多いんだって。一、二年の時は目立たな  
いが、何故か学年が進むにつれてよくなるんだそうだ』と話し  
ているのをきく」というのです。

全く私共の知らないところでこんな話がされることは、こんな  
喜びはありません。多年の念願である小数定数の保育の結果の  
姿ではないかと意を強くするものです。  
(下妻小友幼稚園)

# 小さな幼稚園



浜田玲子

自分がその中に入つて夢中でやつていると大きく感じていた園も、園児数六、七十名で、年長、年少組の二学級では、最小の園のようである。

最近、地元に公立幼稚園はなく、私立幼稚園にも入園させてもらえない、やむを得ず有資格者に協力を求めて、幼児教室を始めた団地のお母さんの話を度々耳にする。形の上では無認可であるが、幼児教育に対するお母さんたちの執念が生んだ幼稚園である。

記憶も遙か遠く、二十三年前、私がかつて勤めていた新宿区

立淀橋第二保育園は、ややこの幼稚園に似た存在と考えればよいかかもしれない。

昭和二十九年四月、新宿区淀橋第二小学校の空き教室を保育室に当てられて開園した私の園は、新宿区で最後の十一園目であった。現在では新宿区に区立の幼稚園は三十数園ありその中の十一園は、その前身である区立青空保育園という名称で、戦

後間もなく始められている。食糧事情の良くない頃で、買い出しに出かける母親たちが交代で保育に当たり、紙芝居や歌、遊戯などを青空教室で始めたものが、母親たちの熱意と区の社会教育課の補助によって、次第に小学校の空き教室を利用して運営されるようになったと言われている。

淀橋第二の最後の園が開園の頃は、やや社会情勢も落ちつき、生活もほぼ安定した時代であり、発足当時より区立の幼稚園に近いものにさせようというお母さんたちの強い願望で、開園までの準備は大変だった。

全く何もないところからの出発。古い殺風景な空き教室を副園長の教頭先生とベンキ塗りをして、園児用の机や椅子、道具類を入れる引出しを整え、全く初步的な環境作りがせい一杯の春休み中の作業であった。

区立という名称でも社会教育の一環として運営されていて、区から年額十五万円の補助のほかは母の会費一ヶ月百円で一

切がまかれていたと記憶する。校長兼務の園長、副園長のこと。小学校の規模が小さく全校児童数四百名足らずで、家族的な雰囲気がある。高学年児童が保育室の掃除を手伝ってくれたり、用務員のおじさんに園児の登園前から石炭ストーブをあかあかとたいてもらったり、小学校に依存しているところも多かった。運動会、学芸会、展覧会等学校行事と一緒に参加させてもらうなど、園独自では大変な行事も楽しくできた。

校庭の一部を柵で囲み園庭として充分な遊具も整備できて、児童の遊びとぶつかることがないように配慮された。後日、園児とは直接関係のない地元の有志や、小学校P.T.A.にも呼びかけて約百名の有志会を結成、毎月百円ずつの会費を出して頂いていた。その中には参議院議員市川房枝さんもいて、いつも励まして下さったことは忘れられない。

開園一年後にはピアノを購入、やがて園児専用のプールもでき、三年目には古材利用ではあったが独立した園舎を園庭近くの場所に落成するところにまで発展していく。現在のように豊かな教材、恵まれた環境の中での保育では考えられないことであるが、折紙、画用紙等の教材、園児のスマック等は問屋街で

求め、安い教材費で豊かな教材をという配慮であったが、これも園児数六十名位だからこそできたことと思う。

古いアルバムを広げていくと、象・熊・兔などの十数個の縫いぐるみ動物に囲まれた御機嫌な子どもたちに混って、二十年以前の若い私の顔も見える。この動物たちはお母さん方の手作りの物だった。型紙を作つて、ミシンをかけ、中にパンヤを詰める。汗とパンヤの屑とでもみくしやになりながらの楽しい作業が、昨日のことのように思い出される。子どもが抱ける小さな物もあり、またがつて遊べるほどの大きい動物もある。

現在の京王プラザに隣接しているあたりが学区域で、当時は淀橋浄水場が大部分を占めるため、家庭数は少ないけれど、新宿西口商店街を含めた地域社会の特色もあって、身体を動かして協力をおしまないお母さんたちの力は偉大なものであった。温かな気持ちで未熟な私に協力してくれたことは、よりよい保育への原動力となつて、やがては区立の幼稚園へ移管するための基礎となつたのではないかと思う。

五年間の短い在職期間ではあつたけれど、お母さんたち幾人かは毎年お会いする機会があつて、何もないところから出発した二十年前のこと懐かしく語り合っている。

## 小さな幼稚園



小林美代子

今年一月のアメリカの新大統領カーター氏の就任演説の中に、「より大きいことが必ずしもよりよいとは限らない……」という言葉があった。私はこの言葉を新聞で目にした時に思い

浮かべたのが、「より大きい幼稚園が必ずしもよりよい幼稚園とは限らないであろう」ということであった。八百人、千人という幼稚園は児童収容所のような感じで、教育機関としては絶対反対したいと思う。

私の園は創立後二十数年で、一時は入園希望者が増して二百名を越したが、近隣に県立一園、私立二園ができて、ここ十年近くは百二十名から百三十名を前後している小規模幼稚園である。

### 学級規模と教職員構成

#### 小規模園のメリットとデメリット

学級数は五クラスで、三歳児一学級二十三名、四歳児二学級

メリットはいうまでもなく、教職員が一体となって児童ひとりひとりの指導に徹底することができる。ある。

五十九名、五歳児二学級四十七名、計百二十九名で、三歳児は二組に分かれて進級し、四歳児組はそのまま担任と共に年長組へ進級する。

一年年二学級編成は、教師、児童ともに、指導計画の作成から日常保育実践において、相互交流が緊密に行なわれ、上下の交流もやり易く、指導の効果の顕著なものがあると共に、家庭的雰囲気をかもし出している。

教職員は園長のほか主任教諭一名、学級担任五名、フリー教諭一名（事務と兼任）、兼務職員一名、パートの職員（主として清掃に当たる）一名、計十名である。

「○○ちゃんがもつと遊びたいから帰るのはいやだというの」

「どうして」

「友だちとけんかしていて遊ぶ時間がなくなつたからっていうのよ」

職員室の話題に対して、教師全員がその子を知り、何とかし

てよい方向に向かうようにさせたいと願う。学級担任があり、組の指導は担任にまかせられるが、問題が起きた時、指導に疑問が起きた時、同僚や主任や園長が親身に相談にのれるのは、

小規模園のよさである。同学年四組も五組もあると、歩調を揃えるために時には幼児を無視して計画を押しつけ、幼児が理解しようがしまいが、「やつた」という実績を作るために画一的に詰めこんでしまう。一組の園児数が三十名かそれ以下であり、二組位であると、年間計画が二人で相談しながらやとりをもつて行なわれる。過去に二百名を越して、三組あつた時、歩調をそろえるむつかしさを見せつけられた経験がある。学級担任がそれぞれのもの個性のよさを発揮しながら、幼児ののびる力をできるだけ芽生えさせる指導は、一組の幼児数と、交流する対象の学級数によって、随分と違つてくるようと思う。

幸い、私の園ではそうした理想的の教育ができる規模であると、二十数年の経験から考へている。

デメリットは、国公立幼稚園では気にかからないが、小規模

園では一人あたりの教育費が高くなることである。私立幼稚園は国公立幼稚園と違つてほとんどを父兄負担に頼つていて、園児納付金を抑えると運営に支障を来たす。

理想はよいが經營上困ることで、現実には「大きいこと」はよい幼稚園だから、人が集まるのだというイメージで、カバーしてしまう傾向があるように思われる。

また逆に規模が小さすぎて、年長児一組十五、六人では、友だち関係に偏りができて好ましくないようである。一組の適正規模、園の適正規模を、教育的に考えて研究されたものがあればきかせてほしいと思う。

幼児期の教育は、決して數(量)で考へてはいけない。質で考へていかなければ人間形成はできないと思う。

「せんせい、さよなら。またあしたくるね」

家庭と同じような親しさで思われる幼稚園でやりたい。

(新潟・あさひ幼稚園)

# 小さな幼稚園



菊池百合

「全部の子どもの名前をやつと覚えたの！」 授業を受けてい

た時、常に積極的态度を示していたKさんが、幼稚園の先生になり、はじめにしたこととして、はんだ声で報告してくれた言葉でした。彼女の勤めた幼稚園は、東京近郊の大田地のそばの、いわゆるマンモス幼稚園です。自分の組の子どもなどといふ狭い考え方でなく、全園児の名前を覚え、顔と一致させたといふのです。「私は先生一年生で、他の先生たちのように上手な保育はできないから、せめて自分でできることをしただけ」とこともなげに語りました。きっとよい保育をしているのだろうと想像し、彼女の努力に頭が下がりました。子どもと先生の結びつきはこんな所からはじまり、おそらく、子ども同志のつながりも深まるこどりででしょう。

昨年四月、四歳の娘を近くの幼稚園に入園させ、母親の立場で幼稚園にふれ、今迄以上に人と人とのつながりの重要さを感じています。入園願書を提出した頃には、近所で最も小さな幼稚園でしたが、驚いたことに入園迄の間に立派な二階建園舎が

増築されていました。園庭は狭くなり、陽あたりは悪くなり、それにも増して園児数の急激増加により、ひとりひとりの子どもを受容する心まで消え去ろうとしてはいまいか不安になりました。

以前ニュージーランドで訪ねた幼稚園は、どこでも定員たつた四十名のこじんまりしたもので、そこに教師、助手、母親の手伝い係が各一名いて保育にあたっていました。保育室や園庭は広々として、日本ならば百名近くもつめこみそうなのびやかなものでした。希望者が多い時には、もうひとつ新しい幼稚園がつくられるという羨しいものです。

子どもの名前すらわからない程園児数が増え、クラス数が増えると、とかく子どもは無視されて、どの組も同じことを同じようにさせようという保育者の考えが強くなるようです。

子どもたちは、自分を知らない、自分をあまり知らない他の組の先生と、型通りの挨拶をしてスクールバスにつめこまれ、一日がはじまります。朝の先生との出会いは、その日一日安定

した時をすぐ大切な鍵だと思うと、心ある出会いがほしいと感じながら娘を見送ります。

幼稚園には友だちが沢山いて、思う存分遊べることを楽しみにしていた娘は、「今日もお椅子にすわっていただけだったよ」と、幼稚園観を修正したようでした。先生の指示に従い、みんなが同じように行動する従順と忍耐の訓練場になつたのです。入園前のすごし方に問題があつて悲しいかな主体性のとぼしい娘は、すんなりとその型にはまり、先生を困らせることなく、小さく小さくまとまりはじめました。折紙をし、見本通りの絵を描き、教えられた歌や遊戲をくりかえし、次の課題が与えられるのを待っています。

待つてほしいのは、すごいスピードで走り続ける先生の側ではないでしょうか。のびのびと安定した環境で、自分の興味あることを、友だちとのふれあいの中で、たっぷり時間をかけて、ある時はほんやり、ある時は試行錯誤しつつ考えながら、満足のゆくまで熱中して遊ぶには、先生の指示、命令、禁止や制限の連発よりも、あたたかい見守りがほしいのです。柔軟性のあるゆとりある保育の中でこそ、幼稚園でなければ経験しない子どもと子どもの躍動的な世界が展開できるのだと思うのです。

半年前から、二歳児八名が週一回一時間半程団地の集会所で遊びはじめました。母親から離れて、同年齢の友だち集団ですごす時をつくりました。包装紙をベタベタはりつけたダンボール箱の車をおし、机のトンネルをくぐり、お互いに信号の合図をしては、列をつくって止まつたり走つたりしています。保育者が信号のつもりで準備したダンボール片は、空箱の太鼓の撥になつたり、粘土のお弁当を作るためのナイフになつたり、予想もできない活用をしてくれます。子どもの想像力のたくましさに感動させられ、子ども同志のかもし出す子どもらしい世界ののびやかさに驚かされています。

子どもの持つ無限の可能性を、大人の狭いかたい考え方で、小さな型にはめこむことなく、子どもをじっくりみつめ、子どもの心にふれ、すくすくと成長させることを援助できる、きめこまやかな心ある幼稚園、子どもたちが自分の意志でたましく活動にとり組め、友だちと先生の輪の中で充実感をつみ重ねられるような幼稚園が、もっともつとほしいとしみじみ感じている最近です。これは同時に、幼稚園に期待するだけでなく、可能な範囲で母親が実行しなければならない課題でもあると思います。私も小さな幼稚園とまではゆかずとも、幼稚園のまねごとに積極的に取り組もうとしています。

## 内なる自然との調和

清水美智子

### 〈進歩とは何か〉

私というのは、いつも頭の中でもやもやしていて少しもさえないといふのがいつもの状態で、右かと思えば左のことを考え、プラスを考えれば必ずマイナスのことを考えるというふうで、いつも揺れ動いています。私が毎日の生活の中から考えてわからないなあと思いながらも考え方をつづけていたことをお話しさせていただきたいと思います。

もつよになりましたのが一九六二年。ふと気がついてみると自分の生活が変わっていた。生活のテンポも非常に大きく変わっていたというのがその頃から十年位の間に感じたことです。私が児児の世界にふれながら、生活のいろいろなことにたずさわりながらきたその間、宇宙衛星が打ち上げられたり、大きな技術革新という幕が開けられたわけです。一九七二年の「保育学年報」には村山貞雄先生でしたか、「知識爆発時代」と、進歩に疑問をもつようと思う、とかいていらっしゃいましたが、人類がとても進歩をとげてきたという風な見方が六十年代に出てきた時だったのです。

その頃私は京都で暮らしておりまして、今は二年程前から奈良にいますけれど、どちらかといふと変化のテンポが遅い、それが風土と関係あるかもしれませんけれど、ゆっくりとしたテンポで私が大学を出ましたのが一九五七年ですけれども、大学院を出て保育科に就職いたしまして幼稚園関係の職場にいろいろ接触を

しか、なかなか動けない人間だったのですから、気がついたら自分の不適応感というのを感じまして大変悩んだ時がありました。そんなことから自分で非常に変化が激しいという現実の社会の動き、これを進歩と考えたら、私は非常に社会に不適応で落伍してしまう感じで、進歩ってなんだろうというのがその頃から出てきた疑問だったのです。

丁度、幼児教育の分野をみせていただきながら歩いていると、「時代に遅れないよう、進歩した時代に適応できるような子どもに」という教育内容の改革が、幼児教育の関係でも言われて、最近の新しい成果をどんどん取り入れたといふものがでてきたわけです。その中で、何が進歩なのかを考えたいという気持ちが、ずっと続いていまして、その時に自分の激しい変化に不適応を起こして落伍しそうな状態を支えたのは、古いものにふれたり、自然の中に身をおくことだったのです。そうしていると戻ってくるものがあるのですから、よくそういう所を訪ねたわけです。

### 〈変わらないもの〉

私の住んでいる所からわりに近いのですけれども、ご存じの唐招提寺——私はとても好きなんですねけれど——あの大好きな本堂の

いらかの前に立っていると、自然に感動で胸がいっぱいになるわけなんですね。この美しさ、このおおらかさ、まろやかさみたいなものが、私が今こういうふうに感じるものが、ずっと以前千二百年位前にこれをつくった人たち、これを建立した人たちも、やはりこの美しさというものを感動の心でつくりあげたのではないだろうかと思うし、奈良などですと、仏さまの前にほんの近い距離に立つと自分というものがほんとうに小さいと感じる。今まで忘れていた失いかけているようなもの、自分がなんとちっぽけな存在なのかということを心の底から感じさせられる。あまり人の行かない時期に訪ねてすわっていると、昔の人などがなぜこの仏像をつくられたんだろうかなどと考えて、その美しさに打たれながら人間の小ささみたかなものを感じていると、人間の歴史というものが千年、千二百年とたつてゐるわけですから、そういう感動とか敬虔な気持ちになるとか、思わず頭が下がるとかいう感情、情緒というものは、昔も今も変わらないですと続いて人間の中に脈打っているものであり、それは一方、高ぶりがちな心との対比で、昔の人もそういうのを求めていたのではないかなどと思えてくるのです。変化のめまぐるしい中で今もって、変わらないものを一つつかめたような気がして、とてもしんどい時は、そういう時間を多くするようにあちこち調整しているわけです。

変化の激しい時代、技術革新の時代、あるいは知識爆発時代といわれたりしてなにもかもが変わつていくようにみえている。生

活のようすが変わっていく中で、何も変わらないものがもあるとしたら、それにもし私がゆきあたつたら、それはとても大事なものなのではないか。私は、少なくとも個人的な経験としては、とてもうれしい出会いをしたと思っています。学生時代から好きではあつたけれども、こんな風な思いにかられたことはそんなになかったと思うと、なぜひかれたかということも、自分がこういう状態でいた時にはじめてわかつたように思うのです。

そういう変化しないものとは、仏像とかお寺とか千何年前の古い建築とかいうものに、昔の人の心を感じとりながらというだけなしに、たとえば夜の空ですけど、京都でも私は南の方に住んでいたからわりに町の灯から遠かっただけでも、今は奈良に移つてもつとまわりが暗いんですね。いなかの方に移りまして夜の空は、こんなにきれいなのかと夜の空の美しさというのをはじめて私は感じまして、そのたくさん降るような星の下にいる、思わず自分の存在、あちこちで鳴いている鳥ですとか見えるがたくさん鳴っていますし、今だったら虫が鳴っています。いろいろな息吹きを感じながら、自分は一緒にその中で生きている、生かされているという意識になつて、思わず生きていること

をありがたいと思う気持ち、生かさせてもらつてある気持ちにふれました。

昔の人もやはりこういう空の下で夜空、私が見ているのと同じような夜空をやつぱり何年も何百年も前の方も見て、いろんなことを考えただろうし、そういえば、カントも星空の敬虔な心といふことを書いていたことも思い出しました。人間の歴史の表面は移り変わるけれども、その変化の底に流れている大自然とのふれあいの中に自分の身をおいた時、人間が自然の中に生かされて、自然の営みの中ではじめて、小さな一人の、一個の存在として認められているような気持ちを私は味わつたわけです。

そういう動搖の激しい時に変わらないもの、自分の心に意識してでなしに無意識的に出てくるような感動みたいなもの、情緒といふか中から出てくるような、感情の高まりみたいなものが、生きるものとして時代をこえて変わらない。もしこれが麻痺してしまつたら、生きものとしての自分というものを自分で確認できなくなるかもしれない。そういうふうなものをなんとなく感じるわけですね。時代をこえて変わらない、表面はいくら変わつても変わらないものをつかみながら考えますと、進歩とはなんだろう、変化していくことが即ち進歩なのだろうかというふうな疑問に対し

て、一つは必ずしも進歩とはいえない問題がたくさんあるのではないかと思われるのです。人間というのは、昔から進歩してきた

えられない側面がたくさんあると思っております。

のだろうかという疑問がもう一つ深まっています。技術といふものもその技術を生み出している精神とが一つに融合して、全体として統一された姿として美を生み出しているのであって、決して

#### 〈情緒の発達〉

ちゃちなものでないのです。そして日本最古の木造建築である法隆寺なんかもその美しさは見事で、力学的にいつても理にかなつてゐるからあれだけ長く命を保つてゐるわけなんです。そういう意味では技術革新といつても、昔は技術のレベルが低かつた、今の方が技術が進んだんだと一概に、そう言い切つてしまふこともできないのではないか。そういう技術といふものは、私たちの生活の中で、人間と技術とのふれ合い、人間と技術のかかわりがあり、という関係からみれば、生活の中にあった技術というものに関心がいきますし、そういう技術が進んだといつていますけれど、進んだ側面がどういう側面なのか、確かに、昔も非常に高度な技術があつたということはいろいろな面から私たちは認めなければならぬのではないかと思います。

それを考えさせられる材料の一つとして、さつきも情緒のことを探しましたが、私が保育科に参りました時に発達の遅れた子どもたちの幼稚園に参加させていただきまして、ここでいろいろな子どもたちに会いました。知恵の遅れている子どももあるし、足の不自由な子どもさんもありましたし、一見どこも悪くないようだけれど、言葉がでないお子さんもありましたし、いろいろでした。その中で「一番重症なのは、情緒障害である」と思ったのですが、その仮説を、今でももつてゐています。

たとえば、まなざしがあつたら思わずにこつと笑うということは、赤ちゃんが二か月から二か月半の間には出て来て、それが一つの社会的な笑いとして気持ちの交流につながり、次のかかわりが生まれてくるわけですが、情緒障害児の場合、ごく初期にあらわれるまなざしをかわして人間と人間の存在を確認し合うとか、また折り紙でつるを折れるようになった時、折り上がったよろこび、うれしさというものが、なかなか出でこない。いらっしゃんという子の例なんですが、絵の具が出してある場面で、その子はあ

たり構わぬつてしまふのですが、たまたまもつていたのが赤と白で、重ねてぬつたので、きれいな桃色がでたんですね。そしたらまわりの子どもたちが「いらっしゃん、きれいな色が出たな」と驚いて集まつてきたのですが、本人の方は表情一つ変わらなくて、パッと次の瞬間筆をおいて行つてしまふ。偶然にできたことの技術に皆が驚きを示しているのに、その雰囲気の中で喜びや驚きを伝えることができなくてつらい思いをしました。

情緒障害がない子どもは、知恵が遅れていてなかなかさみが

もてない子どもでも、やりたがつていて手をそえてやつて、ほんのちよつと切れただけでもこつとする。うれしさを表わしている。一緒に喜び合う。その時の喜びの伝え合い、その感じ合い、その中からその子どもの成長が私たちに感じとれるし、次への意欲となることを信じることができます。

モンテッソリーの教具に大きさの順番に並べるがありますけれど、能力的にはかなり高い、さつきのいらっしゃんという子どもだったら、さつきと並べてしまうんですね。けれども並べたものをながめたり、できたということを、「大きいのも小さいのもいろいろあるね」「きれいに並べたね」と表情や言葉で関心を示してくれない。情緒障害児でもごく初期からつき合った場合は、確かに固さは少なくなり、気持ちのつながりをもつことができたこ

とももちろんありましたけれど、今言つたいらっしゃんは五年生で、相当学校でもやつてあるし、しゃべるようになりましたが、やはり言葉の抑揚は全然ないわけで、棒のような調子で、「今日何があつたの」とお母さんからきかれると、機械的にいつも言わねばならないことだけちゃんと言うというふうなのです。それ以上、つらかったこともあります、うれしかったことも、先生からみればあるのですが、それは、出てこない。しかし今日あつたことは順番みたいな形でいえるわけです。

また別の例で、ろう児のことにもたずさわっているわけですが、ろう児の場合は、耳が聞こえないから言語の自然修得ができるという条件があるわけで、早くから言語指導を中心とした児童教育が行なわれているわけですが、そこで一番の問題点は、名詞は一番教えやすい。これなんかはカードで教えることができるから、名詞は早くからたくさん教えることができるわけです。いろいろ教えていつて覚えさせるという考え方ですから。その次に動詞もいいわけです。助詞、助動詞は難しいわけですが、それよりも何よりも一番難しいのは、感情表現の言葉なんですね。中学生になって、小学校四年生の教科書を国語では使っていますけれど、報告文とか報道文なんかは教えやすいとおっしゃるんですね。感情表現をあらわす言葉が、なんとしても難しいと。

そんなにも早期指導をしているにもかかわらず、なぜそれが育たないのか。つらつら考えてみると、小さい時に子どもが、どういう情況の中で言語を発見してきているか。言語修得の過程で普通の子どもは言葉を機械的に覚えていくばかりでなく、言葉を発見していくわけですが、言葉を自分のおされた情況の中で、たとえば感情であれば、自分の中にその感情がおこっている時にそれ

に的確な言葉がかけられなければ言葉は覚えられないわけです。書いてあるのを見て、困っているのを見て、泣いているのを見て、悲しいというのをいくら教えても、悲しいという気持ちにふさがっている時でなければ、自分の悲しさというものがどういうものか、「悲しい」と「さびしい」のちがいとか、その微妙なところではわからないわけです。日本語は特に情緒的なんですねども……。子どもが特にうれしいなと思つていらないのに機械的にうれしいというふうに指導されると、子どもたちは心からうれしいなと思う気持ちの高まりができる場面がなくて、流されていることが多い。それはヘレン・ケラーを指導されていたサリヴァン女史の、指導過程とかそういう意味での考え方をかいてある書物の中でも、はつきりと指導の中でなぜ、それが難しいのかという疑問が指摘されているし、サリヴァン女史は、やはりその辺が今、どういう情況について子どもの中にどんな気持ちがおこつ

ているか、相手の状態に応じて、一番ぴったりとした感情を表わす抽象的なことばをかけてあげる、話してあげるという形で、子どもたちの世界を学びとるといっています。

機械的にというか、ある一方的な計画で子どもに教えることは、名詞はできるけれども抽象語の場合は難しいわけです。

感情、情緒といふものは、その人その人の内面に深く根ざして外の世界とかかわりあうもので、出会いの中で、長いこと同じ状態が続くのではなくて、瞬間に感じ、ぼやけてくるものです。うつろいやすいものもあり、だからどうでもいいかというとそれが具体的に次の意欲になつたり、感情表現になつたりする大切なものであるだけに、簡単に一方的な計画で教えることができないという難しさがあるわけです。

感情、情緒の問題を考えると、昔の、科学技術のまだあまり発達していなかつた時代でも、感じていたことは同じではないか、赤ちゃんは同じように笑っていたでしょう、恋しいという感情は時代を超えて人間の歴史が綿々と続いている中でずっと変わらず流れている、人間が人間であることの証しであるような人間しさが生かされていると思うのです。非常に大切なものであるし、それを枯らしてしまうような方向にもしも新しい時代の激しい変

化や技術の革新に向かっているなら、そして情緒の共感とか交流とか、共に喜ぶという余裕を与えないすれば、それは、進歩といふ概念とは逆ではないかと思ひます。

そういう生活の中で子どもたちとふれ合いながら感じることは、それが正常だと思われている子どもたちの教育課程の中で、幼児であろうと少年であろうと高校生であろうと自分自身がむずかしい困難な課題にぶつかって、それをのり越えて解決した喜びとか、苦しんで、ようやく突破口を見つけ出して自分が一步前進したと感じた時の感激とか、そういうものを大事にするような教育課程が生活の中に、教育の中にどれだけあるのだろうか。とにかく、これをやってあれをやってということに追われているような生活の中で、ゆっくりと自分が問題に取り組む、プロセスを大事にする、自分の課題に自分が挑戦するような自覚的な経験がどれだけ大事にされているのだろうかというのが、教育のことを考える時にいつもひつかかるわけです。

#### 〈自然との調和〉

私自身、日常的な問題として感じていることですが、子どもの内なる自然との調和ということを言葉として使つたり、自然の中

で生きる人間、自然の中で生かされている人間と感じるわけですが、しかし、自然と人間とのかかわり方というのは、一体どういう方が最も調和したあり方だろうかということを、言葉では一言でかいてしまいますけれど、いつも思うのです。子どもの自然的、自制的成長の調和というものは、どの点で、どんな形でみつけ出すことができるかということを考えるに付けても、人間一般の問題として、人間と自然とのかかわり方というのを改めていろいろな角度からながめてみながら、もう一ぺん、子どもの問題に戻つたりしてみるのです。

生物としての人間の適応能力は、他の動物に比べるならうんと乏しいのです。他の動物なら寒さ、暑さに対する生まれつきもつてている適応の能力があるから、新しい技術を開発する必要がなったわけですけれど、人間の場合には、寒さに対する自然的な自分自身のもつてている遺伝的な適応能力がないわけで、自然に対決して自然の中で生きしていくには、寒い地方なら寒い地方に合わせて、自分の着るべきものを技術的に工夫してつくり出していかなければならなかつたし、あるいは、雨、風、寒さを防ぐ住まいとして、山間部の雨の多いところだったら傾斜の激しい屋根にし、海岸のような風のきついところだったら屋根の造りに特徴がある

し、その地域の自然の状態に合わせてせいいっぱいの工夫をして、自分を自然の状態の中で生かしていくように自分の有り様をかえていく。というのは、適応能力が低いからこそそういうあたりをしてきたのだと思います。

一方自然のあり方そのものを変えられる場合もあります。今言いましたような、暑さとか寒さとか、雨とか風とか、夜とか朝とかいうものは、人間の力でどうしてもかえることができないもので、それに関しては自分の方を変える能力を編み出していくのですが、自然の有り様そのものに手を加えることができる場合には、たとえば自分の食料として食べるのに適した植物だけを集中的に栽培して、他のものをぬいて、自分の生存を確保するために自然の有り様を変えるという技術をつくり出しました。そのように人間は自分の有り様を変える方法と自然の有り様を変える方法と、二通りの形で技術を開発していくのです。それらのバランスをとりながら生み出してきたのが、人間の自然に対する適応といいう状態だったのではないしょうか。そういうような状態から今の姿を見ますと、どちらの方向への技術の開発も必要だったわけですが、現在の姿を見ますと、これは、自然の有り様に手を加えて人間の生存に都合のいいように変えていくという方面的の技術が、非常に拡大するというか、肥大する。そちらの方が強く前面

に出で、自然の状態に人間の有り様を合わせながらということが、かなりひずんできたのではないかと思います。

最近だと、大阪の町中でみられるのと同じようなタイプの家が、山間部でも、海岸地方でも見られるというふうに、だんだん変わつきました。それを促しているのが、産業の工業化の前進というか、工業を非常に進めることによってどんどん同じ製品が出来つてきたということだと思います。これはほんの一例ですが、片方は前に出てきたけれど、片方はどちらかといふと後退する形になつてバランスがくずれました。自然の状態の中で生かしていくように自分の有り様をかえていく方向が欠けているのではないかと、このごろの世の中の状態をみると感じるわけです。

私は植物を育てるのが好きで、いろいろな花を育てていますが、植えかえてまだ根が十分につかない間に、前の余力で、大変見事に花をいっぱいつけるんですが、次の年は、自分でつけたつぼみでありながら、咲かせることができないで茶色に枯らして落としてしまいます。ああ、枯れてしまうのかなと思うと、一年間、じっくり休む時間をとったみたいで、次の年になるとまた息を吹き返して、また今年は、——私は椿が好きなんですけれども——見事にたくさんつぼみをつけています。昨年のあのみすぼらしい姿はなんだつたのかなと思う位に——。自分の根がしっかりと大地につ

くまでの間に花をたくさんつけてしまうと、根を弱らせてしまうわけですね。だから自分で調節してたくさんつぼみを枯らして、枯れ枝をつくって、じっと忍耐の年を過ごしたんだなと、とてもいとおしく思うんです。生き生とした葉になり、大きなつぼみをいっぱいつけてくると、自分の中で根のはり方と花のつけ方のバランス、自分のエネルギーをどう使えるかというバランスをとらないながら、自己調整の力みたいなものがみえるのです。

私たちも自然の生き物なのです。生き物の営みを考える時に、その基本的な性質は、全体としてのバランスをとりながら自然に自己調整をしていく力があるということ、そう考えると、せっぱつまつて追いつめられたような形にならないで、子どもをじっとゆとりを持って見ていくことができるような気がするのです。自分はせつからちなたちなのですから、そんなことを自分に言いきかせるようにしているわけです。

人間の歴史の営みの中で、受け継がれている永遠に変わらない心の働きとか、それから人間が生き物としてのかかわりの中で生み出された自律というものがあるので、そのバランスをとらないながら歩くということが、人間と自然との適応という姿ではないかと思うのです。

(幼稚教育現職研究会講演より)

### お茶の水女子大学幼稚教育現職研究会のお知らせ

幼稚教育の現職者が保育の原理を研究するための定期研究会を開く予定ですので希望の方は左の要項で申し込んで下さい。

一、昭和五十二年四月より、週一回、定期的に開催する。

一、お茶の水女子大学の教官が担当する。

一、午後六時～八時とし、一年間継続する。

一、定員 六十名

一、資格 幼児保育の現職経験のある者、短大卒またはそれにつまつて追いつめられたような形にならないで、子どもをじっとゆとりを持って見ていくことができるような気がするのです。自分はせつからちなたちなのですから、そんなことを自分に言いきかせるようにしているわけです。

一、規則書ご希望の方は左のようにお申し込み下さい。

東京都文京区大塚二ーーーー(〒112)

お茶の水女子大学家政学部児童学科内

幼稚教育研究室 現職研究会宛

氏名、生年月日、住所、現職を記し、五十円切手を同封しないがら歩くということが、人間と自然との適応という姿ではないかと思うのです。

て封書で申し込むこと。

# 閨秀画家 武村耕靄女史

勝 部 真 長

昨年十一月、お茶の水女子大学附属幼稚園の創立百周年の式典を挙げた前後、NHKや民放でも、この幼稚園百年記念にちなんで、幼児教育の歴史を顧みる番組をいくつか放映していた。その中にNHKが朝の番組に坂元彥太郎先生の解説で『幼稚保育の図』を紹介した。この図は武村耕靄女史が明治二十三年にその頃の東京女子高等師範学校附属幼稚園の保育状況を描いたもので、その頃の日展に出品し、間もなく高松宮家にお買上げになり、宮家に秘蔵されていたものを、戦後、宮家から女高師にお下げ渡しになり、女高師の図書館の書庫に秘蔵されて今日に至ったものである。今回特に例外としてNHKに貸し出し、全国の視聴者の目に触れたものである。この縦四尺七寸五分、横一尺八寸五分の絹本着色の構図は四段からなり、一段は童話を聞かせている処、第二段はフレーベル式の恩物遊び、第三段はオルガンを弾いての唱歌、第四段は戸外の自由遊びから成っている。これは明治前半の保育の内容を示すものと見られる。なおこれと同じ図柄の下絵が

附属幼稚園には秘蔵されている。また、園長室の壁に掛けてある『お茶の水風景』は、明治初年のお茶の水の堀割の田舎びた自然を描いて、遠く富士山が見える図柄で、これも耕靄女史の筆に成る。

そもそも耕靄女史とは誰か。誰もその人となりを知る者が私の身近にはいなかつた。ところがNHKのテレビをみて、耕靄女史の血筋の者と名乗る方が園長室に電話をかけて来て下さつた。それが何と仁杉とよさんである。旧姓石川とよさんは私の府立四中での同級生である。石川とよさんの叔母に当たられる幸子さん（石川倉次氏四女）が耕靄女史の養子となつた武村忠氏の妻である。

耕靄女史は本名を千佐子といい、仙台藩士武村仁左衛門の長女として嘉永五年（一八五二）十一月二十五日、江戸芝口三丁目の仙台藩邸で生まれた。母は留勢（松永氏）である。この母は彼女が六歳の時に亡くなつたが、松永貞徳の血筋を受けて、和歌、

書、絵をよくし、千佐子も幼時から母の影響で書、和歌、絵をしたしなんだ。父の仁左衛門は武村家の五代目で、明治維新となつて禄を失い、それに病身であったので、女ながらも千佐子がその細腕で暮らしをたててきた。狩野探逸、山本琴石、春木南溟等から学んだ日本画の技術をいかして、輸出用の扇面などを描いたとい

う。そして、その暇に、横浜共立女学校に通い、また米人タムソン夫人について英会話を学び、明治八年、工部省の助教兼通弁となつた。明治九年、東京女子師範学校の英語の教師となり、明治十二年、アメリカの前大統領グラント将軍夫妻が来日して、明治天皇と会見した時、グラント夫人の通訳をつとめたというから、

彼女の語学力は相当なものであったわけである。この頃、我が国洋画の先駆者川上冬崖について西洋画の技法を学んだという。女子師範学校では英学教授手伝いとして勤めたのであるが、やがて絵画の授業をも受持つことになり、それもはじめは洋画を中心で教えたという。彼女が自ら木版刷りで作った図画教科書に『依様帖』『女子画帖』『小学女子画帖』など数十冊あるが、これは東京馬喰町の興文社の出版である。極めて几帳面な性格であったことはその作品を見ても分かるが、特に下図を見るとその丹念な、正確なデッサンがうかがわれるるのである。女高師には明治三十一年まで勤め、その後、絵画の揮毫に専心しながら次々と展覧会を作

品を発表した。中には昭憲皇太后のお買上げになつた『孝養化隣』、また日本画で『夏景山水の図』『日光阿含瀑布の図』など南画風のものもある。明治三十五年、女子美術学校が創設されると、日本画の教授を委嘱せられ、四十二年には東洋高等女学校にも教鞭をとつた。

父の仁左衛門は島翁と号して、昔の武士氣質の嚴格な人であったが、明治三十五年、八十歳で没するまで、彼女はこの父に孝養を尽し、その犠牲となつて一生独身で通した。もっとも絵画の道に進むためには独身でいることの方がやりよかつたということも



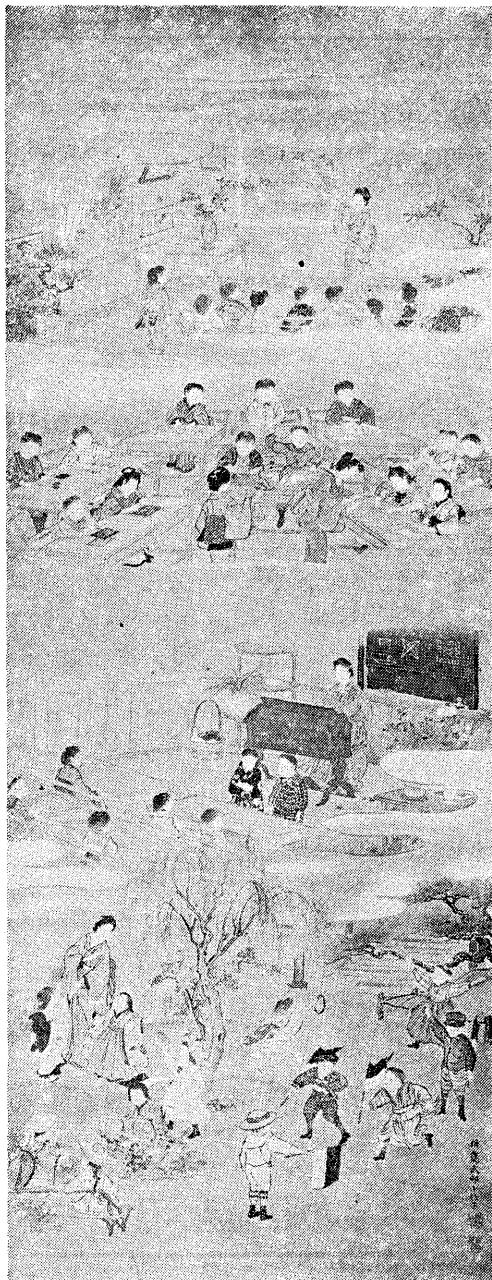
写真上  
次頁写真  
『お茶の水風景』  
『幼稚保育の図』

あらう。父の姉に当たる由子（又は玉江）という女性がいて、伊達家の奥に仕え、独身で終ったが、御殿を退いてからの晩年を彼女は引き取って、最後まで面倒をみたといふ。また、父の後妻のいね子は身分の低い出であつたので、父はあくまでも召使いとして扱い、彼女に「お母さん」とは呼ばせなかつたが、彼女はその人の晩年には自分から進んで「お母さん」と呼んで仕えたといふ。

彼女は絵画の材料を探すためもあつてか、旅行が好きであつた。『みちのくの旅日記』といふ明治三十年の紀行文が残つてい

る。また和歌も多くつくり、そのほかピアノ、琴、謡曲なども好んでいた。明治九年から大正四年の亡くなる前までの日記が『窓のくれ竹』と題して残つてゐる。大正四年六月八日、鎌倉の山荘で病のためにこの世を終つた。享年六十四歳。彼女のあとを養子の忠氏が継いだが、忠氏にも子がなく、武村家は絶えたのである。お墓は本郷の吉祥寺にある。

以上のこととは仁杉とよさんのご教示と遺著『耕靄集』から分かつたので備忘のため記しておくことにする。



## ひとりひとりの子どもを見つめて ②

赤 羽 美 代 子

四月号で紹介したM夫の行動の記録を続けることとする。

突然、五歳児の男子S・T・N・Yが「先生を逮捕する」と言つて、床に座っていた私の頭上から、重なり合つて倒れてきた。「何もしていません」「いや逮捕する」と、しばらく揉み合つてから、私の手を持ち乱暴に連行しようとする。私は目をM夫に注いで助けを求めた。M夫は全身を緊張させた。いきなり大きな張りのある声で「何だよ、先生は何もしてないぞ」「何だ、M夫なんかだまつてろ」とM夫の前にNが立ちはだかる。M夫はいきなりNを押しのけて「先生は何もしないぞ、あっちへ行けよ」。側にいたT子もA子も彼に加勢する。「そうよ、あっちへ行きなさい」その勢いに驚いてか「わあーっ」と四名は行ってしまった。M夫はSたち四名の後ろ姿をじっと見送っている。M夫の母親が「家ではいつも、Sたち四人の話ばかりしているんですよ」と語ったことを思い出す。

M夫の今日は、教師との満足したかかわりを持ち、また、日頃自分が気にしているSたち四名ともかかわることができた。その心の内の喜びが、きりりと立っている彼の姿勢に

出す。

見ることができる。

K夫が「先生、Maちゃんが頭から水をかぶりましたよ」と知らせにくる。Maは言葉の出ない障害児である。Maは水が大好きで一日に七、八回の着替えをする。私の周囲にいた子どもたちは、Maの着替えに教師が時間をとられることを心得ていて、それぞれの遊びに散つていった。

M夫は私の側を離れずに、私をじっと見ている。「Mちゃん、先生ね、Maちゃんの着替えしてくるわね。遊んで待つてくれる?」「いいよ」M夫は一語言つて、なお私を見ている。私はMaのいる方向に急ぎ走りながら、彼の視線が私の後

る姿を追つてゐるのを感じる。M夫に背を向けたまま、M夫に右手を振つた。左手も高く上げて振つた。

一瞬、私の後ろ姿とは、子どもたちにどんな感じを持たせる姿なのかと、とまどつた。暖かいまなざしと、喜びを持つた人の姿を感じとらせる姿なのだろうか。それとも、疲労を背負つた板のような味氣ない人の後ろ姿では？ 私は裸で立たされているような、言いようもない恥ずかしさと、また、子どもたちに与える何物も持たない無力な自分の後ろ姿を思ひ、寒ざむとした。

M夫の着替えを済ませ、私は庭に出た。砂場でM夫が「先生、ちよとときて」と私を呼んでいる。M夫の前には、中位の大きさの穴が一つ掘られている。その横に一つ山があり、もう一つの山を製作中である。「先生、この穴からね○○（怪獣の名前か？）がボワーンと空に飛びでるんだよ」掌を合わせながら、力強く大きな手で、ボワーンと上空に向けて発射させた。よく見るとその穴の壁には、シャベルの跡が、なまなましく、力強く残つてゐる。何か底知れぬ深さと、大きなエネルギーを感じさせられた。

M夫は今、ボワーンと言う大きな音と共に、広い空に向か

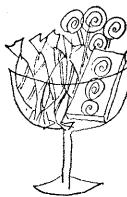
つて閉じていた心の扉を開いたに違いない。「先生にこの山を一つあげるね」「まあ、嬉しい。先生ね、M夫ちゃんのお山に遊びに行つてもいい？」と言いながら、落ちていた細い木の枝を隣のM夫の山に掛けた。

この橋が、M夫と私の掛け橋になるような気がした。「いいよ。もっと太いのを持ってくるよ」M夫は庭に捲しにかけて行つた。息を弾ませて拾つてきたやや太めの木の枝を、私の掛けた細い枝の横に掛けた。「先生は、トコトコつて、太いのを渡つて僕の山に来るんだよ。僕は、先生の掛けた橋を渡つてさ、先生の山に行くからね」

M夫も私も、同時に共感し合つたようである。私は立ち上がり、他の子どもの所に去つた。

此の日、彼は降園時に、「先生、また、あしたくるね」と元気に帰つて行つた。

（靈南坂幼稚園）



# 私の保育



太田茂行

はじめに

以下の文章は僕が現実に職場でやり得ていることではなく、時々自分のやっていることを振り返った時に遠くの方にボーッと浮かんでくることを書いたものである。言わば、霧にかかる遠くの灯台の光のようなもので、一体自分が少しづつでもその光に向かって進んでいるのかどうか、また、その光 자체が幻にすぎないのかどうかも判然としていない。しかし、この光が幻であろうがなかろうが、僕がこの光を感じる以上は、これは今の僕にとって何らかの意味を持つものである。従って、今の僕はこの光に少しずつでも近づくよう、何かにつけて努力するしかないものである。

## (1) 「保育の本質」私論

保育とは何か？と問うことは、教育とは何か？と問うことと根本において同じである。幼稚園、保育園、小学校、中学校、高校、大学、はたまた成人大学等の様々な「教育機関」と称するものがあるが、それらが担うべき使命は根本的

には一つである。

その使命とは、そこに集まる人間の一人一人に「生きていく」ということを、「よりよく生きていく」に変える力を提供する場となる。ということである。一人一人の人生を、より充実した、より豊かなものとして行く機会と力を提供する場が、眞の教育的環境なのである。より苦しみのない、より幸福な人生というものを目指せと言っているのではなく、逆説的だが生き生きと苦しむ力、不幸に対しても豊かに直面する力、姿勢を培う場であるはずだと言っているのである。

教育の意味をこのようにとらえると、教育などといふものは学校が作られる以前から、「教育」という言葉の作り出される以前から、人間の生活するところには存在したはずだ。いや実際にそうなのである。例えば真赤に燃える夕陽に、一匹の蟻に、友人の一つの言葉に、見知らぬ人の小さな行為に、何かを「教えられた」、「心をあくらました」と深く感じる経験は誰にでもあるだろう。そういうことがまったく無いという人がいたら、その人はどんな「高学歴」を持つても真に無教育の人なのである。教育などというものは、人間の生活するところ、どこにでもいつでも生じ得る極めてありふれた自然な現象なのである。「よりよく生きていく」こ

とを人から学び、人が物から学び、人が自然から学ぶということは、本質的に家庭・幼稚園・学校等という区分とは無関係に生じる事実なのである。

さらに教育という現象の本質はあくまでも「学ぶ」という行為にあるのであり、決して「教える」という行為にはない。「教える」ことが意味を持つのは、その行為を通して「教える」側の人間が何かを学んだ時だけである。先生・教師・教授等と呼ばれる人種はどういうわけか「教える」ことに熱中し、結局自分自身を貧しくしていくことが多い。「家庭教育」「幼稚園教育」「学校教育」等と勝手な区分を作り、やれ、家庭では身辺の自立、幼稚園では六領域、小学校では国語に算数・理科・社会……等というのはまったく「教える」側に浸り切った発想である。そこでは本来「よりよく生きていく」ことを学ぶための一つ一つの方法に過ぎない事柄が達成すべき目的化され、子どもたちはアメとムチで追い立てられる。「教える」側の人間自身に「よりよく生きていく」ことを学ぼうとする姿勢・エネルギーが生まれない限り、彼は教育の場に際し、子どもに伝える何も持ち得ず、ただ本来は方法に過ぎないことを教育の目的とし、子どもからも眞の学ぶ目的を奪い、結局子どもを巻き添えにしつつ自らの貧しさ

を深めるのではないだろうか。

さて、「よりよく生きていく」というのはある価値を指向することである。どんな価値を選ぶかは人により異なるし、またその本人にとっても自分が一体何を価値とし、何を求めているかはつきりしない、わからない、という場合も多くある。また、ある選ばれた一つの価値への指向は決定的なものではなく、時間の経過の中で変化しうるものもある。しかし、この、ある価値を指向する、ということは、人間の健康な精神に共通した本能的 requirement とも言えることである。それは、「生きている」という現実の状態性を常に超えて、自分にとって内面的により充実したもの、より豊かなものを求めようとする極めて自然な内的要求なのである。

価値を指向すると言つても、それは倫理的価値、あるいは道德的価値といったような抽象的なレベルのことではなく、もつとわれわれの生活感覚に根ざした日常的・現実的なことなのである。例えば、「この頃どうも自分の生活にハリがないな……」とか「何となくダラダラと流されているようだ。何とかしなければ……」とわれわれが感じる時、われわれの内部に価値への指向性が芽生えているのである。また一人の子どもが「今日は何をしようかな……」と思いつつ、言葉に

ならない一種の期待感をもつて幼稚園の門をくぐる時、その子の内部に価値への指向性が生まれているのであり、そしてその子が全身を打ち込む遊びに出会った時、その遊びを通してその子は一つの価値を実現しつつあるのである。

「よりよく生きていく」ことへの欲求は人間の精神の本質的なバイタリティーのようなもので、本来、老若男女を問わず有しているはずのものである。しかし不幸にも大人は人生での様々な試行錯誤の結果、とかく身体的にも精神的にも疲れやすくなつておらず、自らこの欲求に背を向けることが多い。したがつてこのバイタリティーは、子どもの中に、その典型的な形で表わされると言える。そして保育の本質とはまさに、子どもたち一人一人の「よりよく生きていく」ことへの欲求・バイタリティーを豊かに育てていくことに他ならぬい。

ではどのようにして、この保育の本質を実現していくかを考える前に、保育の主人公である幼児とは一体何なのか、どんな存在なのかということを考えてみよう。

## (2) 「幼児の本質」私論

子どもは遊ぶものだ、と言われる。その通りである。道路で、公園で、幼稚園の庭で、ビルの階段で、電車の中で、駅で……と数えあげれば切りがない場所で、われわれは遊ぶ子どもに出会う。どんな遊びをしているか、ということになるまさに数え切れない種類の遊びがそこに見られる。幼児の生活は遊びに始まり遊びに終る、と言つて決して過言ではない。では、幼児の本質とは遊ぶということにある、と言えるのだろうか。そうではない。それはあまりに皮相な、うわべだけの見方だ。遊びへと幼児を内面から駆りたてるもの、そこに幼児の本質があるのである。

一人の女の子が両手を大人に持つてもらい、グルグル回しを何度も何度ももらう。また、男の子二、三人が幼稚園の庭の片隅で、「こんどはしろ砂を持ってこい!」「よし!」「つぎはくろ砂だぞ」と言い合いながら泥団子作りに我を忘れて熱中する。こんなありふれた遊びを心理学的に見て、身体運動の快感とか、めまいの快感とか、また、創造の喜びの体験とか、泥をこねるという原初的感覚の快感等、いろいろ

に解釈・分析することもできるであろう。しかし肝腎なのは、一体何がこの子たちを遊びへと駆り立てるのか、ということをしっかりと捉えることである。

幼児をその内面から遊びへと駆り立てるもの、それは全身全霊の躍動を求めるある衝動（衝動）、自らをより豊かに、より充実したものにせざるを得ない一つのあくなき欲求である。そしてこれは先述した「よりよく生きていく」ことへの欲求に他ならない。先に、この欲求は本来は老若男女を問はず人間の精神が有しているもので、その原型とも言うべきものが子どもの中に見られる、と述べたが、幼児の本質とはまさに、この欲求を極めて率直、かつエネルギー性な形で有していることにあるのである。

「よりよく生きていく」ということは、自分が今、ここに、こうやって「生きている」という現実の一つの状態性を常に超えて、より豊かなもの、より充実したものを求め、そこに新しい自分を実現しようとするのである。一つの遊びに全身を打ち込んでいる子どもは、片時もじっとしていることがない。文字通りその子は一つの「状態」にいることがないのである。瞬間、瞬間に新しい自分を打ちたてているのである。イスに座ってじっと絵本に見入っている子どもも、心を

躍動させているのである。刻々と新たになつてゐるのである。

### (3) 「保育を成り立たせるもの」 私論

幼児の本質は、「よりよく生きていく」ことへの率直でエネルギーッシュな欲求・バイタリティーにあり、保育の本質は子どもたち一人一人に内在するこの欲求・バイタリティーを育て、豊かにすることにある。では、一体何によつてこのようないい保育が成立するのだろうか。それは「出会い」ことによつてである。

幼児は「よりよく生きていく」という欲求を意識したりはしない。この欲求は意識を超えて幼児の全身からほとばしり出るものである。それほどこの欲求・バイタリティーは幼児にとって極く自然な、身近な、日常的なものである。そしてこれが自然なことであるため、幼児はそこに丸ごとの自分を投げ入れることができる。幼児はこうして、大人より遙かに容易に、あることに全身全霊を打ち込むことができるのである。ありのままの自分を差し出すことができるるのである。言わば、彼は世界に対してためらわずに自己を開いているのである。これが幼児の基本的な存在形態である。

このような態度で世界（環境）に接する幼児は「出会い」のである。彼は一匹の虫に出会い、園庭にできた一つの大きなハチマに出会い、取組み合いのケンカの中で友だちに出会う。出会いというのは、正面同志でガツンとぶつかり合うことである。お互いに丸ごとぶつかることであり、相手そのもの、相手の存在そのものを感じることである。すなわち、相手そのもの、相手の存在そのものを感じることが、すなわち、相手そのものへ贈られるものなのである。幼児は自分の自分を差し出すものへ贈られるものなのである。幼児は自から得たこの贈り物によつて、より豊かになるのである。「よりよく生きていく」との喜びと励ましを得るのである。

僕は、ある幼稚園で一人の男の子が「せんせい、ちょっと来て来て。すっごいものを見せてあげる」と言つて、僕を裏庭に実ったハチマの下に連れて行き、「ね、すっごく大きいきゅうりでしょ!! ほんとに大きいねえ。きょうはこんなのが見れてほんとによかったなあ、ね!」と言つた時のことだが、また、別の男の子が本当にギラギラした眼で、園庭に飛んできたトンボを素手で必死に追いかけっていた時のことが忘れられない。彼等は絶対にあの時、一つのキュウリ（この時これをハチマと言ひ正す必要は全くない）に出会い、一匹のトン

ボに出会ったのである。もしかするとそれ以上のもの、「自然」とか「生命」そのものと出会ったかも知れない。そのことにより、この子たちの「生」がどんなに豊かに、充実したものになつたか測り知れないほどだと思う。

保育の本質は幼児の「よりよく生きていく」という本質的な欲求を豊かに育てることにある。そしてそれは「出会い」により成り立つものである。換言すれば、保育の場とは出会いの場である、ということだ。そこにおいて幼児は物に、自然に、他の子どもに、そして「保育者」という大人に出会う。さて、「保育者」とは保育の場をセットする大人である。しかし「出会い」そのものは決してセットできるものではない。すなわち出会いの場とは、出会わせる場ではないのである。それはあくまでも、出会う場である。

したがって、保育者が準備すべきものは、まず第一に、泥、砂、水、植物、小動物といった自然的環境。第二に、使用用途の幅広い物品類。室内の机やイスや壁等も子どもたちが上に乗ったり、逆さまにしたり、絵をかいたりして遊び道具に使う物と考えること。ブランコの立乗りはいけませんなどと「指導」するのは論外である。第三には、入園児を原則的に通園地域を決める程度の無作為抽選にすること。多種多

様な子どもがいることは、それだけ多彩な出会いを可能にするのだから。そして第四には——これが最も大切なことだとと思う——保育者が自分自身の中に子どもと共に文句なく楽しむ心を培っていくこと。保育者自身が「よりよく生きていく」ことへのバイタリティーを失わないこと。以上のことことが保育者が準備すべき最も基本的なことである。

本当の保育を成り立たせるものは「出会い」である。幼児は物と、自然と、他の子どもと、保育者と出会うことを通して、新たに、より豊かな、より充実した「生」を味わう。「よりよく生きていく」との欲求をふくらましていくのである。ところで幼児が体験するであろうこれらの出会いの中で、幼児にとってある意味で最も必要であって、かつ最もむずかしいのが保育者と出会う、ということである。

幼児はまだ独立した人格ではない。自分の支えを自分の中には持っていない。幼児の支えは基本的には母親であり、幼稚園では保育者である。だから、保育者との出会いは他の子どもとか、自然物とかとの出会いのベースともなるものである。この、幼児が保育者と出会うということをむずかしくする大きな理由が、保育者側に二つある。一つは保育者自身が「よりよく生きよう」とする欲求・バイタリティーを見失つ

ている場合であり、子どもとも楽しめなくなっている場合である。

すなわち、保育者が用意すべきものとして述べた第四の条件が失なわれた場合である。この時、保育者は自ら「出会い」に背を向けていることになる。

そして、もう一つは「保育の本質」の項で触れたことだが、保育者が保育の方法と目的を取り違え、「教えたがり屋」になっている場合である。この時、保育者には出会いの気持ちはあるかも知れない。しかし実際には出会い得ない。なぜならこの時保育者は、子どもは自らの遊びを通して最も多く学ぶものだ、ということを忘れているか理解していないから。一つの「お遊戯」を覚えるとか、五月には鯉のぼりの切絵を作るとかいうことは、保育の目的・本質ではなく、単なる便法に過ぎない、ということを理解していないからである。要するに、自分が教えることをばかりに注目して、目の前の子どもたちの一人一人が「今」「ここ」で「何を」したがっているのか、ということに配慮しないのである。子どもたち一人一人から現実に流れ出ている「よりよく生きていく」ことへの欲求にフタをしてしまうのである。結局、自分では子どもに向かっているつもりでも、結果として子どもを遠くへ押しのけてしまうことになる。だから、子どもはこの保育者と出会

うことができなくなるのである。

これに対して、子どもが自ら遊んでいるところに入っているたり、子どもが誘われて行ったりして、そこで共に楽しんだり、様々な子どもの気持ちを受けとめて、その時の自分にできるベストを尽そうと努める保育者は、子どもと出会いに触れ、それに応えることができるからである。

一口に子どもと出会いと言つても、それは並大抵のことではない。子どもの気持ちを受けとめる、共感するということだけにしても、実に多くの場合がありむずかしいことだ。また、保育者には子どもの成長・発達に関して、以前の姿から近い将来の姿に及ぶ適切な洞察が必要とされることがある。その上、現実の保育の場は子どもたちの動きと共に、パッパッと変化し流れていく。また、われわれ保育者自身も常に元気はつらつ、という訳にもいかない。しかしこれらの大波小波に揺られながらも、それでもなお子どもとの出会いを求めに行くことがやはり大切なのである。それが本当の保育を成り立たせるものであり、われわれ自身をも豊かにして行くものなのだから。（日本総合愛育研究所・家庭指導グループ）

# 子どもとの出会い

## ——幻視の世界——



本田和子

枝々に、新芽が淡々しい姿を見せるとき、人は、そこに生まれ出る生命の神秘を見、それが、華やかに萌え上がるとき、においやかな青春を感じる。そして、緑が濃く盛りを誇るとき、

燃焼する生命や飽くなき成長の姿を見たりする。私どもはやがて、早春やたけなわの春、或いは初夏などという季節そのものにまで、成長のイメージを与え、生命の相でとらえ始める。季節とは、人為的な時の区切りにすぎない。それは、訪れるものでも去り行くものでもなく、まして、成長や生死とは縁もゆかりもない筈であるのに。然し、私どもは、それを、恰も「人のよう」見るのである。

もちろん、これらの表現を、擬人論的世界観の現われではなく、単なる比喩、詩的形容に過ぎないと言うことは易しい。私どもの知性という名の醒めた眼は、地球の自転と公転によって、太陽の照射を受ける位置が、一定の時間毎に変化し、その変化がくり返されることを知っているのだから。

然し、太陽は、その輝かしい顔を、やはり朝毎にのぞかせ、風は爽かにささやくのではないか。私どもの心的現実としては、そちらのとらえ方がより確かであり、より真実と言えないだろうか。客観的と呼ばれるいま一つの現実の中に身を置きつつ、生命なきものを、生命あるもののように見ること、これを仮りに「擬人的」と呼ぶとすれば、私どもは、いかに多くの現象

も、月は、やはり雲のかげに「姿をかくす」のだし、星は、依然としてひそやかに「またたく」のである。

私どもの中にも、「物質的真実」を超えて、「イメージ的真実」をとらえることのできる知覚が、未だ枯れ切ってはいないということであろうか。子どもとの出会いは、この「幻を見る眼、幻に感じる知覚」を、より鮮かによみがえらせてくれるようと思われる。



記紀神話に見られる古代人たちの世界像は、二重の視覚から成り立っているもののように思われる。彼らの眼は、真黒な泥土から青々と萌え出した葦の芽に感動し、その生命力の神秘に讃歎の声を挙げる。「美しい葦の緑、汝萌え出づる神、うましあしかびひこぢよ！」と。

「大和しうるはし」と、その山こもれる国土を歌つた彼らにとって、国土もまた、単なる自然のたたずまいを超えて、賞でいくしむ存在、わが愛する身内であつた。大和という土地を対象化し、その自然のありようを鑑賞して「うるはし」と評したのではなく、「わが愛する大和よ」と高らかに呼びかけ、そ

の呼びかけによって、愛するものとの共存が、よりむつまじく豊かであることを願つたのである。

それら古代人の国土觀を証するかのように、「いざなぎ、いざなみ」二神の國づくりの過程も、次のように語られている。「伊予二名島」は、「身一つにして面四つなり。面ごとに名あり。故、伊予の国は愛比売といひ、讃岐の国は飯依比古といひ、粟の国は大宜都比売といひ、土佐の国は建依別といふ」というのである。四つに区切られる「伊予二名島」の創成は、二人の男と二人の女の誕生なのだ。男神と女神の婚姻による国生みのゆえに、生み出された島々は、それぞれに「ひめ」であり、「ひこ」であることもまた、当然と言うべきであろうか。ところで、国土が即、神であり、山も川も木々も草も、そして泥や海の泡つぶまでが、それぞれに神であるとは、一体、何を意味するのだろうか。

わが国の古神道において、神々は人格神として完成されることなく、素朴な自然神のままに、森羅万象の中に遍在していく。自然の靈力がさながらに神であり、そのゆえに、すべての現象が神を顯現し得た。山は山でありつつも、同時に神であり得た。山に神がいますのではなく、山が神を顯現し得るのである。「伊予国」が伊予国であると同時に、「愛比売」でもあるよ

うに、古代人の眼は、まさしく、二重の視覚で世界をとらえていたのだ。

彼らにとつても、山はもちろん山であった。それは、樹々や下草を茂らせ、その枝葉に雨露を宿させ、それらの滴りを貯えてやがて平地へと押し流す水源であった。川は、稻作に貴重な水を、田畠へと運ぶ水路である。古代人たちの冷静な眼は、それらの機能を恐らくは正確にとらえたのであろう。登呂その他の遺跡が物語るように、杭を打ち並べて水路を構築したり、畔道を作つて湿地の排水を工夫したりする自然制御の営みも、くり広げられているのだから。

しかも、それら山や川は、ヒエロファニー的瞬間に、聖を顯現する。山や川は、祭の日の「ハレのまなざし」の下で、「大山<sup>おほやま</sup>御神<sup>みこと</sup>」であり、「弥都波能元神<sup>みづのはのちのかみ</sup>（水の名）」であるのだ。自分たちが打ち並べた割り杭さえも、「角杙神<sup>つのりのかみ</sup>」と呼ばれる神であつた。

古代人たちの幻視の世界像を、未発達ゆえの神秘的態度と合理的行動の混在、アニミズムの所産とのみ片付けるべきではないであろう。文化人類学者B・マリノウスキイは、メラネシアの未開民族に関して、次のような見解を示している。すなわち、彼らは、その農業活動において、極めて幼稚な道具を用いて、弁えているのである。勿論、その知識は狭いものでながら充分な収穫を上げている。それは、自然条件と農作業に関する広汎で明確な知識のゆえである。然しながら、彼らの農作業は、呪師の指導によつて行なわれ、呪術が重要な位置を占めている。彼らにとつて、呪術は、豊作のための欠くべからざる手続きなのだ。しかも、この二つの態度、すなわち、正確な知識に基づいて合理的かつ慎重に行はれることと、呪術に従うこと、この両者について、それぞれの機能と効果が、彼らの中では明確に区別されている。植物の生長の自然の過程や、手入れによつて避けられる害などのように、把握可能な諸条件の一群と、他方では、偶然の災害や幸運など、予測も防備も不可能なことがらがある。前者に対しても、知識と労働で対処し、後者には、呪術でのぞむのである。科学には科学の位置を、呪術には呪術の位置を、それぞれにところを得しめよ、というわけなのだ。マリノウスキイの文章を、次に引用しよう。

「若し諸君が土人に、烟を作るのに主として呪術でやり、仕事はいい加減にすべきだ、等と暗示でもしようならば、彼はただ、諸君の単純さを、微笑で迎えるに決まっている。彼は諸君と同様に、自然的条件と原因があることを知つており、またこれらの自然力を、精神的肉体的努力で統御し得ることを、観察によつて、弁えているのである。勿論、その知識は狭いもので

はあるが、その範囲に於て、健全で、神祕主義に陥らないものである。若し垣が崩れたり、種が壊れるか、乾いたり流れてしまったりしている場合、彼は呪術に訴えないで、知識と理性に導かれて、労働に依頼するであろう。然るに、他方ではまた、彼の経験は、彼の予めの慮りにも拘らず、またその努力をも超えて、因力と力があり、それがある年は雨と日照りが時を得、害虫は影をひそめ、秋には山のような収穫があがる、という風に、万事をうまく滑らかに運ばせて、常にない、思いがけぬ恩沢をもたらすが、他の年にはその同じ力が、不運や不仕合をもたらし、徹頭徹尾彼に付きまとつて、彼の不撓不屈の努力と、根拠の最も確実な知識とを、失敗に帰せしめることを教えたのである。これらの方を、而して唯これらの力だけを、支配するために、蚕人は呪術を用いたのである。」

合理性と呪術性とがないまぜられて展開する彼らの生活を、未分化などと軽々しく評してはなるまい。それは、すべてを一方の極に還元するという愚を避けて、それぞれの極が荷ない得る範囲の責任を分担し合うという、一段上の合理性に根ざしているというみかたすら可能なのであるから。

幼い子どもたちの描く世界像もまた、古代人や未開民族のそれに似て、二重の視覚に依頼するもののように見える。例えば、「ままごと」に興じる彼らにとって、木の葉の上にのせた砂のかたまりは、「おいしいごちそう」であり、カップの中の泥水は「デザートのコーヒー」である。しかも、彼らは、それらが単に砂のかたまりであり泥水であって、口に入れることも飢えを充たすこともできないことを知っている。観察し認識する子どもたちの手指は、それらの砂が水を加えれば柔かな泥土となり、乾けばサラサラと流れる粒子であることを把握しているし、カップの泥水は、時間の経過と共に、沈澱物と上澄みに分離することにも気付いている。そのゆえに、彼らの手は、時折、ごちそうを捏ね直し、コーヒーをかきませるために働くのである。

遊ぶ子どもたちは、砂は砂としてどんな性情を持ち、木の葉はどこに行けば拾えるかなど、彼らなりに正確な知識を貯えておるし、また、絶えず新しく獲得し続けてもいる。そしてそれらは、日常的な認識する眼によってとらえられる世界の一面

である。と同時に、遊ぶ人である彼らの眼は、世界を呪術の輪の中に閉じ込めて、すべてをイルージョン化する。「遊戯空間」という呪的世界の中で、遊ぶ人のまなざしは、「おいしいごちそう」を賞味し、「きれいなお皿」を喜ぶのだ。

「ハレの日」の古代人のように、「遊びというハレの世界」において、子どもたちも、砂や水という物質に、遊戯的聖を顕現させるのである。彼らもまた、二重のまなざしに生き、二重の視覚で世界をとらえるのだ。

子どもたちとの「ままごと遊び」の中で、大人である私どもが時々、忠告を受けることがある。「うそのこちそうよ。本当に食べちゃだめよ」と。遊びという虚構の世界の「こちそうゆえに、食べることもまた虚でなければならない」と言うのである。「ハレのまなざし」の通用する範囲を、彼らは正確に知っているということであろうか。仮りに、私どもが砂の「こちそうに本当に唇をふれたり、木の葉のお皿をなめてみたりするなら、子どもたちは困惑の微苦笑で愚かな大人を見守るに違いない。文明人が、農作業のすべてを呪術で行なつてみることをすすめたなら、微笑んで黙殺するであろうメラネシアの原住民さんがらに。

二つの極を調和的に共存させ、それぞれにところを得させる

こと、二重の視覚で世界をとらえ、ある時に、その一方を強く顕在化して日常世界を聖化すること、子ども、古代人、未開民族など、すべて原初の存在に共通するのは、この特性である。そして、健やかな生において幻を見ると、このようなあり方においてのみ、可能となるのではないだろうか。



レオ・レオーニの傑作の一つに、「あおくんときいろちゃん」という絵本がある。「あおくんです」、最初の頁で主人公が紹介される。といつても、真白な画面のほぼ中央に、丸くちぎった青い色紙がポンと一つ。目も鼻も、もちろん、手足もない、丸い色のかたまりである。然し、私どもは、そこに何故か「あおくん」を見る。紛うかたなき存在感をもつて、「あおくん」を感じるのである。こうして、私どもは、いつの間にか絵本の魔術師レオ・レオーニの世界に引きずり込まれていく。無邪気で活潑でやんちゃな、わんぱく坊主の「あおくん」。おるすばんを放棄して、こつそり外へ脱走するいたずらっこの「あおくん」。「あおくん」は、絵本の画面に「見える形」として表現されているゆえに、明らかに、青い色のかたまりである。然し、その確か

な存在感において、単に「描かれたもの」ではなく、「生命あるもの」なのだ。そして私どもも、子どもたちと一緒に、「あおくん」の実在を疑わず、彼のはずんだ呼吸や、ボロボロとこぼれる涙を、極く身近に感じている。「あおくん」は確かに、私どもに親しい愛すべきいたずらっこだ。そして同時に、それは、紙の上に印刷された青い色のかたまりであるのだ。

この二重の視覚の下に、私どもは、子どもたちと安らかに楽しい生を共有する。私どもは、無理をしているのだろうか。子どもたちに合わせようとして、馬鹿馬鹿しいと思いつながら面白そうな顔をしているのだろうか。必ずしもそうではない。私たちにとっても、「あおくん」の存在が真実と感じられているのだし、彼がその辺をとび廻っていて不思議ではないような、そんな時間に浸っているのだ。

仮に、「あおくんの実在を信じるか」と、開き直って問われたとしたら、私どもは、必ずしも、イエスとは答え得ないかもしれない。それならば、単に「信じているふりをしている」のか、「單なるゼスチュア」だというのか。それもまた、否である。私たちは、決して「信じているふりをしている」のではないか。もし、「ふり」という言葉を使うなら、その「ふり」こそ私自身であるような、「ありをしている私」以外の私はないよ

うな、そんな状態なのである。虚構の世界に入りこんでいるからには、虚なる私こそ真実である、と言うべきであろうか。虚実一体とみることも可能であろう。無理なく、自然に、虚構の世界に身を置いて、そんな自分が極めて素直に肯定されているのだ。

そんな体験がくり返されるうち、私どもは、「物質的現実」の世界に、虚の世界の「心的現実」を持ち込むことを始めたりする。例えば、傍にいる実在のやんちゃ坊主の上に、「あおくん」をダブらせて見ていたりすることがあるのだ。身近な子どもの中から、「あおくん」がにじみ出してくる、と言うべきかもしれない。まさしく、実在の中に幻を見るということになるうか。

このとき、私どもが見ているのは、「実在の誰それ」、或いは「絵本のあおくん」ではなく、両者に共通する「子どものエッセンス」なのかもしれない。私にとって、微笑ましく嬉しく、興味深く思えている「子どもの的なもの」を、そこに見出している、言うことも可能であろうか。

それは、二重の視覚が重なり合った地点に生まれる、一つの幻である。そのゆえに、この幻は、具体的なイメージでありつつも、抽象的な観念でもあり得る。二つの視線が一体化すると

き、イメージと観念もまた、重なり合うのである。



いるイメージ的な生き方、例えば「風のささやき」に耳を傾けたり、或いは「星のまたき」に涙ぐんだりする自分を、感傷的などと卑下することなく、素直に正当に位置づけることが可能となるのだから。

「物質的現実」と「心的現実」に関する差別意識が発達し、合理的の知性の働きが目立つてくると、幻を見る眼が力を失い、イメージ的視力は後退すると、一般には言われてきた。そして、客觀的と称される「物質的現実」に密着した世界把握が前面に押し出され、一つの極の下にすべてを整合させた「物質的世界像」が形成される。イメージに代わって言葉と概念が力を持ち、王座に即く。発達とは、往々にして、このよきな進化の直線としてとらえられがちであった。そして、その線上に立つのが、私ども大人であると、みなされていた。

然し、私どもの中にも、幻を見る力は、失われ切っていないのではないか。イメージ的視力さえ回復されるなら、私どもも再び、「物質的現実」と並べて、「イメージ的、心的現実」の世界を取り戻し、生きる時空間をより広やかに拡大していくことが可能なのだ。

そのとき、私どもは、より自由に、のびやかに、自身のありようを肯定することができる。何故なら、既にいまも実践して



# チイ子

上田貞美

K君が朝二階から起きてくると、猫のタマが庭で何かにじやれているのを見つけ、

「お姉ちゃん、タマが何かにじやれているよ」

といいながら庭に出て、もみじの木の下に行く。

「たいへんだ、早く来てよ。お姉ちゃん。タマをおさえ  
てよ、僕一人じゃだめだよ」

と応援を求めている。

「どうしたの」

と言いながら、姉も庭に出て行つた。

「はなしなさー」

と姉にいわれて、タマは素直にはなした。二人は一羽の

子雀を、大事そうに両手で持つて来た。台所にいた母親

は、そつと受けとつて見つめた。まだ嘴の両わきに黄色の少

やわらかい所がついている。眼は小さく黒く瞬いでいる。

K君が小さな傷を見つけた。タマにでもやられたのかも知れない。その傷にマークユロをつけた。

「前にも子雀にお水をやったけれど、なかなか口をあかないよ。子雀を育てたと言つたことを聞いたことがないしね」

と母親はためらつた。しかしそんな事を言つても、現実はこの子雀のいのちを守ることにある。そこで母親は考えた。ちょうど、うずらにやるすり餌が家にあることを思いついた。

K君と姉は心配そうに、母親の動作を注意深く見まつっている。

「うずらにやる時よりも、少し水を多くして、ほんの少

し作つてちょうだい」

と、母親は子どもたちに言うと、つまようじの太い方を平らに削って、小さな、小さなお匙のようなものを作った。削った面は子雀の嘴の両側にある、黄色いやわらかなところを痛めないように、角を落し滑らかにした。左手で子雀のからだをそっと持ち、右手で小さな手製のお匙にすり餌を少しのせると、口もとに近づけたが、やっぱり口を開けようとした。そこで、嘴の黄色いやわらかいところから、そつと小さなお匙を入れたら、びっくりしたのか大きな口を開いた。しかしうるるとあたまを左右に振ると、すり餌はバッペッとそこいらに散った。子雀がからつぽになつた嘴をペチャペチャさせて、真黒い眼をピカピカさせている顔は、何ともひょうきんでかわいらしい。母親は心の中で、どうしてもすり餌をたべてもらいたいと思つて、また考えた。K君も姉も、子雀の様子を見てもどちらに立たずんでいた。

母親は、母親が子どもの頃、二羽の十姉妹が卵を産んで、次から次へふえていった時、母鳥が大きくあけている雛鳥の口の奥深くに嘴を入れて食べさせていた姿と、つばめの母鳥が、巣の中で大きくあけている子つばめの口の中

深くに、餌を入れて食べさせていた姿を思い出した。そこで今度は嘴の両わきの黄色いところから、そつと小さいお匙を入れると、大きな口を開いたので、上あごの方へ餌をなするようにしてみた。すると、すり餌をごくんとのみ込んだ。その方法で、やつと子雀は食べることをおぼえた。K君も姉も明るい表情になつた。

「少し食べたからだいじょうぶだね、ママ」

とK君も安心した。そして鳥がごに水とはこべを入れ、そつと子雀を入れる。びっくりしている子雀にK君は、

「早く馴れてね」

と話しかけている。母親は餌つけに成功したよろこびで胸が一杯だった。家族が一人ふえた感じだった。赤ちゃんのように、きっと早目に餌をあげた方が良いと思ったので、三時間おきに餌をあげることにした。

○

心配した夜もあけて、五時半に朝の餌つけをする。だいぶ上手に食べられるようになった。「チイー、チイー」とかん高い声で元気に鳴く。部屋の窓ぎわにつけてある大きな机の上に鳥かごが置いてある。東に面した窓から朝日が

一杯さし込む。今日も子雀が元気に育つていくように、暖かい陽ざしが鳥かごを暖めている。

庭にも毎日十数羽の雀があそびに来る。そのほか、季節によつては、目白、じゅうから、尾長、山鳩、ひよどり、鶯なども来て楽しませてくれる。みんなの朝食のころになると、庭の雀たちは集まつて来る。「チイー、チイー」と子雀のかん高い声が聞こえるのか、庭の雀たちも、「チュン、チュン、チュチュチュ」とにぎやかに鳴く。よく見ると、庭の雀にも二、三羽、子雀がまさつている。母鳥から餌をもらつてゐるのもいた。K君も姉も見つけて、興味深く、毎日くるのを楽しんで待つてゐた。

鳥かごにもなれ、すり餌も母親の手からよく食べるようにになったある日、餌を食べ終つたあと、母親は子雀をつかまえている左手をそとひらいて見た。パタパタと羽ばたいたが、母親の手から机の上におりる程度で、まだ上手に飛べない。そこで朝の餌づけのあとしばらくは部屋の中で自由に飛べるように、かごから出しておくことにした。K君と姉は、毎日母親が朝の餌づけを終えると、子雀と遊んだ。部屋の中を自由に散歩させた。まだよく飛べないので、K君は両手を少し高くして手をはなしてやると、少し

飛んでピアノの上にとまつたり、窓わくにとまつたりする。毎日一時間ぐらい遊ばせて、またかごに入れていた。

三時間おきに餌をやらなければならないので、みんなでそろつて外出する時は、箱に入れて、餌と小さい手製のお匙といつしょに風呂敷に包んで連れて歩いた。

子雀は「チイー、チイー」と大きな声で元気に鳴くので、自然と「チイ子」と呼ぶようになり、K君と姉の会話の中に、「チイ子ね」といつの間にかおり込まれていた。

### ○

こんな毎日が続いていたある日、南の庭で遊んでいたむれから離れた一羽の雀が、枝から枝に飛び移り、東側のもみじの枝にとまつた。そして首をかしげたり、からだを左右にチヨンチヨン動かしたり、「チュチュチュチュ、チュチュチュ」と鳴いたりすると、部屋の子雀も「チイー、チイー」と鳴いて鳥かごにとまつたりする。はじめは気がつかなかつたが、その雀と子雀の様子を見ていると親雀のように思えてきた。それからこの一羽の雀は毎日来ては、枝から枝へ、窓に近い枝へとチヨンチヨン飛んでは用心深く小首をかしげ、昨日よりは今日と、様子をうかがい

ながら、だんだん近づいてくる。

窓ぎわにはらの木があつて、クリーム色の花が窓ごしに

美しく咲いている。親雀はそのばらの木の枝に飛びうつって来た。しかし、そうとう用心し、緊張した態度で、のび

上がつたりせわしく左右を向いたりしてうかがつている。

しばらくしてばらの花びらを一枚くわえると、窓台に飛びのつて、子雀を見てはからだを左右に、チヨンチヨンと振り

り動かしている。母親はそれを見ると、何ともいえない、

母性愛ににじんだあついものを感じた。さつそくK君と姉

を呼んで、そつと見るよう言つた。

しばらくして、ばらの花びらをくわえた親雀は、ガラス戸ごしで中に入れないで、あきらめて飛んで行つてしまつた。

「

雀さんのおかあさんはえらいわね。毎日何とかして子どものところに行きたいと思っていたのね」

とつぶやき、さらに、

「あのばらの花びらをくわえた時、なにか美しい絵を見ているような気したわ」

と、母親は二人に話した。姉もK君も、はじめて見た親子の愛情に、ただ胸をうたれたようだつた。きっと親雀は

もどかしいにちがいない、何とかしてあげなくてはと母親は考えた。

## ○

早速次の日は、朝の餌を食べさせ運動が終ると、子雀をかごに入れて窓を開け、親鳥が入ってこられるようにしてみた。

「チユチユチユチユ」

と、チイ子と、親雀との話し合いがはじまる。親雀はいつものように、南の庭で遊んでいるむれからはなれて、チイ子にあいに来る。もみじの枝から枝へと渡り、ばらの枝まで来ると、少し小首をかしげて部屋の様子をうかがつて

いる。今日はガラス戸があいている。窓台からチヨン、チヨンととびあるきをして、また小首をかしげて様子をうかがう。静かだ。たしかめるとまた、チヨン、チヨンと机の上まで来た。子雀のはしゃぎようといつたら、「チイ、チイ」と甘えているように鳴いてはかごにつかまる。親鳥は「ここまでおいで、早く早く」とでも言つているようにな、しばらくその場で「チユチユチユチユ」と、くりかえし鳴

いていた。そのうちにかごのそばまで行って、窓の方へ、

ふたとびしては「チュチュチュ」と鳴き、チヨンチョ

ンとまたふたとびしては「チュチュチュ」とくりかえ

している。どうも「こうやって来てごらん」とでも言つて  
いるように、道案内をしているようだた。単身で家中の中  
に入る親雀は、おそらく捨身で来たにちがいない。「そん  
なにこわがらなくていいのにね」と母親はK君にそつと言  
つた。その日はそこまでであった。

次の日も親雀は、窓から机に来てかごにとまつた。子雀

はびっくりした。大はしゃぎだた。すると親雀は、すつ  
と飛んで行つてしまつた。しばらくすると、口に何かくわ  
えて戻つて來た。よく見ると、親雀の嘴からはみ出でてい  
る小さい蛾の羽がブルブルと動いている。親雀はかごにと  
まる、子雀に口うつしをした。おみやげをもつて來た親  
雀は満足した様子だつた。親雀も少しなれで安心したの  
か、用心しながらも、毎日何か口うつしをするようになつ  
た。あのクリーム色のばらの花びらも、やっぱり口うつし  
で食べさせていた。みんなは雀がばらの花を食べるのを見  
るのは、はじめてだった。きっと活力がつくのかも知れな  
い。母親は、何といつても、虫類が補充できたのでほつと

した。

○

母親と親雀とで育つているチイ子も、だいぶしつかりし  
て來た。運動の時も部屋の高いところまで飛べるようにな  
つた。夏休みも終りに近づいたある日、みんなで話し合つ  
て、チイ子を親雀に戻してあげることにした。

「チイ子、今日はおかあさんとお帰り。一生懸命に飛ぶ  
のですよ」

朝の餉つけが終ると、高く両手をのばして飛ばしてみ  
た。バタバタと飛ぶ。羽もしつかりして來た。ひとまずか  
ごに入れて、うち中で別れを惜しむ。朝食を済ますと、み  
んな送りに集まつた。K君も姉も、はげましの言葉をかけ  
る。別れるのはやっぱり淋しい。チイ子も知つてか、甘え  
ている。親雀の声がしてきた。思い切つて窓を開ける。親  
雀はもみじの枝まで迎えに來た。とりかごの入口をそつと  
あける。親雀がこわがらないようにはなれて見送る。いつ  
ものように、「チュチュチュ」と鳴いては飛びうつり、  
枝から枝に飛びうつるやり方を、一つ一つ教えているよう  
である。やっと鳥かごのところに来ると、

「早くおいで、こつちやだよ」

と言つてゐるようだ。「チュチュチュチユ」と鳴く。二、三度くりかえし、やつとチイ子はとりかごの出口から飛び出した。親雀は丁寧に机の上をチヨンチヨンと小さくとび歩きをしては、チイ子を振りむく。自分の方に来そうになるとまた、窓の方へ行き、窓台で「チュチュチユチユ」とけたたましく鳴いて、「こつちやだよ」と呼んでいる。

チイ子もまねて、親雀のあとを一つ一つ着実に行く。とうとう窓からばらの枝に行ってしまった。何だか、力がぬけて行くような気がした。ばらの枝から、青木の枝、もみじ

の木に飛びうつって行く。だんだん遠くなつて行く。もみじの枝から道をへだてた隣の家の桜の枝に飛びうつった親雀は、チイ子が渡つているのを心配そうに、からだを左右

にうごかしてやきもきしながら待つてゐる。チイ子は思い切つて飛んでみた。しかし足を滑らして落ちてしまつた。

そこへ猫のタマが飛び出した。うちじゅうで関心をもつていたので、タマも何となく庭でその気配を氣にしていたようだつた。

母親は急いでチイ子を探しに行つた。  
「チイ子、いらっしゃい」

とつかまえようとすると、親雀がけたたましく鳴くのだが、逃げてしまう。飛べずに、チヨン、チヨンととび歩き

で、早い。そのうちタマが邪魔をする。うまい具合に、チイ子は積んであつた切り枝の下の方にもぐり込んだので、母親は手を入れて、やつとチイ子をつかまえることができた。チイ子を連れて部屋に戻ると、またかごの中にそつと入れてあげる。まだ無理のようだつた。K君も姉も、チイ子が戻つて來たので、とてもうれしかつた。それに親雀に気がねがなくなつたからだつた。

「もっと大きくならなければ帰してあげられないよね」

K君はまたチイ子と遊べると思つた。



それから一週間ほどして、日曜日に巣立たせてあげよう<sup>と</sup>次<sup>の</sup>日曜日にしてよ」と話しあつた。K君は

と言つて、少しでも別れる日を伸ばそうとした。

その日曜日は意外に早くきてしまつた。

「チイ子、元氣でね」「さよなら」

「また毎日遊びに来てね」

「チイー、チイー」

その日も部屋の中で遊ばせてみた。少し力強くなつたよ

うだつた。かごに入れ、みんなで別れを惜しむ。親雀の声が  
庭の方でした。窓を思い切つてあける。またもみじの枝に  
迎えに来た。この前と同じように、上手に誘導している。

前の練習が良かつたのか、この日の方が早く、窓を出でば

らの枝にうつつてしまつた。母親は、「さよなら、元氣で  
ね」と心の中でさけぶ。みんなもさけんだにちがいない。

「忘れないで毎日来てね。元氣でね」

「チイ子、おめでとう」

「よく頑張ったね」

の門出を祝つた。

それから毎日、チイ子は庭に遊びに来ては、親から餌を

口づけてもらつていて、ころを見せてくれた。

木へも無事に飛びうつった。さて次はどこに行くかと思つ

たら、右隣りに大きな葉が茂つてゐる泰山木の枝にうつつ  
た。葉は大きく茂つてゐるので、チイ子には安全地帯だ。

親雀はしばらくそこにチイ子をおいて餌をさがしに行つた。  
ようだ。

夕方、親雀はまたけたたましく「チュチュチュチュ」と

鳴いた。チイ子の声もした。庭に出て見ると、泰山木から

今でも、朝食の時、チイ子に似てゐる子雀を見ると、K  
君も姉も、みんなだれからとなく、チイ子のうわさをして  
はなつかしんでいる。

(小川幼稚園)

★ 海外文献紹介 ★

## Curious Mind 『好奇心』

“Time To Be Curious”

*Childhood Education*

April/may 1976, pp. 290—295

by Dorothy H. Cohen

子どもの好奇心とおとなのかかわり方にについて、示唆あふれる小論をもとに考察してみましょう。

子どもの好奇心は、生まれた時はどんななのだろう。そして、それはどのように育っていくのだろう。筆者は、レイチエル・カーソン (Rachel Carson) の『驚く心』(A Sense of Wonder) の詩を引用しています。

子どもの世界は新鮮で美しく

しかも、不思議と驚きで満ちている。

子どもが生まれたままの驚く心を。

生き生きと保つためには、少なくとも

その驚きを分かち合うことなのである

ひとりの友が必要である。

そして、その友も子どもと一緒になり

彼の住む世界の喜びや感激や不思議さを  
発見するといふのです。

ドローハン氏 (Dorothy H. Cohen) は、子どもと不思議な世界を分かち合う存在として、おとのなのあり方に触っています。彼女は、「ワークブックも、教育機器も、教科書も、コンピューターも、

どれも完全にぴったりと子どもの好奇心と出会うことができない。おとなが人間として複雑な精神と感情をもつことが、子どもの人間としての複雑な精神と感情に出会うことができるのだ」と語っています。

さて、もしも好奇心の弱い子どもやおとながいたら、どうするのでしょうか。彼女はそれについて、「好奇心はお互いに伝わり合うものである。もし、子どもたちがすでに幼い頃好奇心を抱く態度を失ってしまっていたら、好奇心の強い教師によって、再びその心をとりもどせることだろう。一方、教師の方で新しい世界を探索するのに遅ればせな人は、好奇心の強い子どもによつて、驚く心を持つ人になることができるだろう」と言つています。

それでは、一体、好奇心はどんな時に生ずるのでしようか。以下、彼女のいわんとしているところを要約してみます。

「子どもはふつう、自分が知っていると思ったことの中に新しい事象が加わってくると、そこに矛盾を感じる。矛盾とか葛藤は、どちらにしても楽しく快い経験とはいえない。しかし、こういう経験が、新しい学習の基礎になるのである。そのためには、環境が豊かで、それが刺激となって、子どもが疑問や問題にぶつかることである。しかし、豊かな教育環境だけでは十分とはいえない。子どもによつては、慣れない環境の中で恐怖心を抱き、環境

に圧迫されてしまう子もいる。だから、葛藤とか矛盾のように、子どもにとって異質なものを、教師が興味や好奇心にかわるよう心を配らなければならないのである」

ここでもやはり、単に豊かな物だけでなく、教師の人間としての豊かな心くばりが大切であることを主張しています。

好奇心は、具体的にはどんなことから始まり、どのように変化していくのでしょうか。子どもが好奇心を抱きそうな具体的なきっかけはいくらでもあります。それは個々の子どもによつて異なるので一口では語れませんが、大切なことは、「子どもが好奇心を抱きそうなことについて、教師がすべて知らなくてよい。知つていれば安心かも知れないが、子どもと同時に興味を抱き始めて、おとなはより早くそのことについて知ることができます。従つて、子どもへのアドバイスもできるわけである。だから、教師が十分に知らないからといって、子どもの探索への欲求を満たさなければいけないということではない」と言います。さらに留意すべき点は、我々はふつう、子どもの好奇心を引き出すことは非常に熱心になるが、一旦引き出した好奇心をどうするかについてあまり考へないという指摘でありましよう。子どもが好奇心を抱いて、我々はふつう、子どもの好奇心を引き出すことは非常に熱心になるが、一旦引き出した好奇心をどうするかについてあまり考へないという指摘でありましよう。子どもが好奇心を抱いたら、それでおわりというものではありません。コーネン氏は、

「この時点では失敗することが多い。環境からの刺激が大で

子どもが興味を抱きやすくなつていても、環境は子どもの好奇心の発展の手助けはしない。子どもに生じた好奇心はさらに広がらなければならない。つまり子どもの興味や好奇心を引き出すことと同様、それらを子どもが抱き続けることも大切なことがある」と語っています。そして、子どもの好奇心を先へのばすためには、母親や教師のものの見方や理解のし方の影響力が大きく、それが子どもの学習のガイドとなるといつています。

教材のもの可能性と、子どもの発達段階を十分に知るといふことも、教師の大重要な仕事です。たとえば、「三歳の子どもが、水中にブラシをひたして壁に塗るという行為をしていたら、その子どもは、塗ること自体、つまり、感覚的経験を楽しんでいるのである。しかし二年後、同じ子どもが幼稚園で、画用紙の上に色々形を考えながら絵を描こうとしていたら、彼は最初の興味を発展させているわけである。もし、七歳の子どもが砂や粘土に水を加え、その形がなくなる程どろどろにするという感覚経験をしてみるとしたら、これは、その子どもは、教材の順応性または発展性、それに生産への可能性についての興味をのばしているのではなく、ずつと以前に到着している経験を行なつているのである。このような一種の退行現象は、しばしば子どもが成長へのエネルギーを新しく補給している時にあらわれるものである」彼女

がここでいわんとしていることは、もし子どもが最初に抱いた強い興味や好奇心を、その先へのばすことができず、ある一定の段階でとどまっていたなら、教師はできるだけ子どものその様子に敏感でなければならないということでしょう。

最後に時間の問題をとりあげて、子どもが好奇心を抱くには十分な時間が必要であるといつています。「教師はあまりそれについて急ぎすぎてはいけない。現代は、すべて機械的手段によって世の中が仕組まれているが、人間が好奇心を抱くためには、その生命のベースにあつた十分な時間が必要である」そういう意味で、今は、人間が本来持つ生き生きした好奇心が生まれにくいのかも知れません。

筆者は、以前、美術教育家のローエンフェルド (Lowenfeld) 氏に直接教えを受けたというアメリカの一女性から、氏がたつた一枚の葉っぱでもいかに深くその美しさに感銘し、またその驚きが周囲の人々の胸の奥まで伝わってきたかについて話されたことがあります。

驚く心はおとなにしても、本物でなければならず、そこには人間だけしかなし得ない行為があるわけです。

# 保育の体験と思索

——子どもの世界の探求——(六)

津 守 真



## 四歳の誕生日

三歳児の秋は、幼稚園でも、いろいろの点で夏まえとは違ったことが見られる。子どもたちだけで群をして走りまわる姿がある。秋になってはじまり、秋の間つづいて見られたことに、劇あそびのようなことがある。指人形を手にして、人形舞台の前で、三、四人の子どもたちがたむろしている。女の子が私のところにきて、「おじちゃん、七人の小人しよう、まほうつかいのおばあさんになつて」と言つたりする。このことが私にとって印象的だったのは、家庭児A(三歳児のとき幼稚園にはいつていなかつた)の三歳の秋にも、同様に劇あそびのようなことがしばしば見られたからである。そこで次に家庭児Aを中心にしてみるとす。

三歳児の秋には、クラスの半分以上の子どもが四歳の誕生日を迎える。彼らは多かれ少なかれ、似たような誕生日を待ち望む日々の経験をしているのだろう。四歳の誕生日は、子どもが自分の

ものとして体験する最初の誕生日と言えるかもしない。三歳のときは、その日になれば、自分の誕生日とわかるだろうが、前から待ち望むほどではない。二歳の誕生日は、にぎやかな気分を喜ぶだろうが、自分の誕生日という認識はないであろう。

9月25日

劇あそび

先日から、にほんむかしばなしの『かえるのえんそく』で、大阪の蛙と京都の蛙の話をAは気に入つて、何度も繰返して読んでやつていた。それから、『にげたにおうさん』のはなしも、何度も何度も読んでくれとせがんでいた。

今日は母親が、「おおさかのかえるです、きょうとがみたいな」と言うと、Aは「あたち、とうきょうがみたいな」と言う。母親

が「おべんとうもってでかけよう」と言つて風呂敷包をかついで歩くと、Aも「おべんとうもってでかけよう」と言つて、包をもつて歩く。こうして大阪の蛙と京都の蛙の話らしく、会話と動作がつづく。もちろん本の通りの話の筋ではなく、子どものとらえたところを出してゆくので、子どもがどこを印象づけられたかがわかる。

大阪の蛙と京都の蛙では、風呂敷包のお弁当をかついで出かけ歩いて歩いていくところは、Aの最も好んだところである。Aはにこにこして包みをつくり、かついで歩く、もちろん、大阪とか京都とかの地名は、子どもにとつてはほとんど意味をもたないので、Aは東京がみたいなと言つてしまふ。Aにとっては、お弁当を包んで出かけることが、心を躍らせるところである。

その次に母親が、『にげたにおうさん』の中の力持ちになつて、

力持ちの話では、ボウーという音がきこえて、どしどしと力持

児のPが「ボウー」と言う。(その話の中で、どこからともなく、ボウーというおおきなおとがきこえてきて)、におうさんが、「あれはなんですか」ときくところがある)。母親が、「あのおとはなんですか」というと、Aは「むすこさんのあちおとです、ボウー」という。それからAは力持ちの息子になつて、「どしどしどし」と足音をたてて帰つてくる。母が「あの音はなんですか」というとPが「じしんです」と言う。Aは「むすこのあしおとです」というの」というとPは「むすこのあしおとです」と言い直す。こうしてAと二歳のPと母親との間の会話と動作がつづいて面白い。何十遍もくり返して読んだ本だから、自然に会話と動作がつづく。もちろん本の通りの話の筋ではなく、子どものとらえたところを出してゆくので、子どもがどこを印象づけられたかがわかる。

ちの足音が次第に近づいてくるところが関心のあるところである。Aはどしんどしんと足音をたてて歩く。Aはもっと小さい一、二歳のころ、音をこわがった。遠くから聞こえてくるたいこの音、飛行機の音などにおびえておとなにしがみついてくることがしばしばあった。年少の妹がつみきでドアをドンドンと叩くと、とんできて髪を引張つたりした。三歳をこえた時にも、大人にはきこえないくらいの遠くからの小さな音にも、「あれ何の音」とき耳を立てたり、雨や風が雨戸を搔きぶる音に、夜中でも目を見ました。遠くから聞こえてくる物音は、何か巨大なものが次第に押し寄せてくるような感じを与えるものである。このAが力持ちの話で、近づいてくる足音のはなしに特別ひきつけられた。

そして、自分がどすんどすんと足音をたてて歩く。物語の中で子どもが特別に関心を寄せる個所には、その子どもの体験が背景としてあると考えてよいのかもしれない。あるいは物語の作者や語り手が、人間に共通の体験をとらえてそれを物語として作り出していく、子どもによって、強くそこに印象づけられるのかもしれない。

Aは物語の中で印象づけられた場面を、母親や妹と共にやつてみて再現し、自分の体験をたしかめ、また克服しているのではないだろうか。自分が力持ちになつて足音をたてて歩くときには、

自分が音を出す者になり、音の出所を自分で認識している。また母親や妹が力持ちになつて足音を立てて歩くとき、それはもはやしなから恐れるものではない。このような劇あそびで、Aは近づいてくる音を克服しているのを見るのであるが、それは生の現実の一部であり、すべてが解消するのでないことはもちろんである。ずっと後年になっても、押し寄せてくる宿題や試験の前に立ちはぐくみ、おびえ、それに打ちかつのに人並み以上の努力を費しているのがこの子どもである。

三歳児の秋には、幼稚園でも家庭でも、劇あそびのようなものがあちこちに見られるが、その劇あそびの中で子どもは、自分が過去の印象深い体験を現在に再現し、その体験の中にあるものを見きわめようとしているのではないかと思われる。物語による劇あそびでは、自分の体験は物語の中で確認され、さらにそれをもう一度再現するという二段階をへる。小さい子どもに本を読んだりおはなしをするときに、子どもの実際の体験の中にないことは聞いてもらえない。この文章を書いていたとき、寒い日の暮れ方の墨田川の傍の公園で、父親はさぞかし寒いだろうのに、小さい子どもがコンクリートの滑り台からすべりおりるのを、手で支え

て傍で見てやっているところに出会った。子どもは笑い声をあげて何度も滑る。そんな子どもに「滑り台の階段をよいしょと上がつて高いなあと空をみたら、空が赤くなつていました。すべりおりて、ウワー超特急みたいだと思つたら、お父さんの手がのびてきました」というようなおはなしをしたら、きっとよろこぶだろうと思ふ。それぞれの体験を口ぐちに加えてくれるだらうと思つて見ていた。筋だけのおはなしをしても、きいてもらえないだらう。筋はあとから振返ったときに明瞭なるものであつて、はなしの一こまひとこまは、子どもの体験に訴えるものでなければならぬだらう。だからおとなが筋書きを作つて、それに合うようになつては意味をもたないのである。

子どもはおとなと一しょに、あるいは友だちと自分の体験のイメージを再現して遊ぶだけでよいのである。

劇あそびは子どもの過去の体験のイメージを現在に持ちきいたらして、子どもなりに、そのことの意味をより明瞭にする作業であるとも言えるだらう。過去を現在に持ちきたらすときには、過去はその時の変化する表面的具体的状況から切り離されて、本質的な部分を浮きぼりにして舞台にのせることになる。そのような作業を三歳児は抽象的に言語化された形で行なうのではなく、身体を動かすあそびの形で行なうのである。このような作業はおとなにまで継続する精神のはたらきの原型とも言えるものであつて、おとなになれば、もっと反省的思考、あるいは回想的思考の形をとる。反省的というのは倫理的規準に照して省みると、いのではなく、現在の位置から過去の本質を見きわめようとするという意味であり、回想的という時も過去の事実の記憶や感傷をいうのではない。そのときには自分でも理由が分からず泣きわめいたり、あるいは何か感動した現象のみしか明らかでなかつたことが、時間で隔てて眺望したときにその体験の意味が、その時点の現在なりに明瞭にできる、そのような精神のはたらきをいうのである。それはすいぶん幼い子どもにもそれなりの形であるものであつて、三歳児の劇あそびは、その一つの形であると言えよう。もちろんすべての三歳児が劇あそびを好むわけではないが、どの子どもも、原始的な形での反省的思考をしていると言つてもよいのであるうと思う。

Aが力持ちの劇あそびをした九月二十五日にかいだ描画がある。(六十一頁写真1参照) それは中央に人間らしいものが描か

れ、バックがみどり色で塗られたものであるが、右端は一本の線

で区切られて、その内側のみが塗られている。すなわちその一本の線の内側の空間は、その背景の空間から浮き出て舞台のようになり、別の空間を作り上げている。一つの体験のイメージを過去から切り離して現在に持ちきたらしたかのようである。描画にも同じ精神のはたらきがみられる。

#### 風に舞う木の葉のイメージ

Aの四歳の誕生日に近い秋の一日、Aと散歩にいったとき、道路を風に吹かれた木の葉が走っていた。私はきれいな木の葉を拾い、Aと一緒に籠にいれて持つて帰った。家に帰つてから拾つてきた木の葉をとり出して、せっかく拾つてきたのだから画用紙に貼つておくのがいいだろうと思って、画用紙に貼りはじめた。

Aは直ちに私の画用紙をわきから取つて、赤いクレヨンでかきはじめた。そのときに描いた絵が四枚ある。一枚は赤いクレヨンの円の中に人間が四人描かれたものであり、一枚は貼つた木の葉のまわりに同様の赤いクレヨンの円の重なりと人間が描かれたもの（写真2）、もう一枚は、赤いクレヨンの円の中に十人以上も人間が描かれ、さらにオレンジ色と茶色の渦巻きと、Aがいつも美しいものを描こうとするときに好んで描く赤い球のネックレスが描かれて、その上に木の葉が貼つてある（写真3）。おそらく二枚目（写真2）は、私が木の葉を貼つたもののまわりに描いたものであり、三枚目（写真3）は、Aが描いたものの上に私が木の葉を貼つたのであろうと思う。この作業をしていたとき私はAの傍にいたが、散歩にいって拾つてきた木の葉を貼つたり、子どもは絵を描いてしばらくの時を過ごしたのだから、それで満足し、

その次の忙しさに追われて何を描いたのかもよく見ないで過ぎてが実感をもつて何度も再現してゆくようなことである。

滑り台をすべりおりるときのスリル、路ばたで猫と出会ったときの驚き、だれかが足音をたてて近よってきて扉を叩くときのおそろしさなどを、子どもが理解したように再現できるようにすることである。これは何をもつかしいことを言っているのではない。滑り台をすべりおりるときのスリル、路ばたで猫と出会ったときの驚き、だれかが足音をたてて近よってきて扉を叩くときのおそろしさなどを、子どもが実感をもつて何度も再現してゆくようなことである。

しまった。もちろんそのときはそれでよかったですのだとと思うが、数年後にこの絵をとり出して見ていたときに別のこと気に気が付いた。

ここに描かれているのは渦巻であり、美しさである。Aは美しいものを描き、作ろうとする試みをしばしばするが、そのときに赤色を用い、赤の球の連なりを描く。その絵は全体が渦巻の回転をしており、描かれている人間も渦巻の中を動いているように見える。私はこの一連の絵をあらためて見直して、回転の動きと美しさに魅せられて感情の高揚を感じさせられた。前に述べた四歳の誕生日のころのAの高揚した気分を考え合わせると、このころ

のAの一般的生活感情がこの絵に反映されていると言えると思う。さらに加えて、散歩にいって木の葉を拾ってきた直後にこれが描かれたことは、このときの木の葉のイメージと関連があると考へてよいだろうと思う。それで私は同じころの秋の日に木の葉のイメージを探ろうと思い、同じ道をゆっくりと歩いてみた。木の葉はからからと音を立てて道路を走っていた。ふと上を見る

と、木の葉が落ちながら空中を舞っている。風の中を乱舞する木の葉は実に美しかったが、それまで私は空中を落ちつたある木の葉に足をとめて見とれたことがなかった。いつもすぐに落ちた木の葉を見ていた。その後、風のない静かな日に、公園の林の中に

立っていたとき、木の葉が枝から落ちるときにかすかな音を立てるのを聞いた。葉柄が離れるときの音である。

子どもは落ちた木の葉ではなくて、空中を落ちつたある木の葉に感動し魅せられているのかもしれない。私が木の葉を拾って持ち帰り、画用紙に貼ったとき、空中を風に舞う木の葉のイメージには少しも気付いていなかった。しかし子どもはその木の葉のまわりに、直ちに渦巻の動きと美しい赤い球を描いた。空中を渦巻いて落ちる木の葉の美しさの表現である。子どもはどこにでも率直に自分の感動を表現しているのに、おとなはそれに気付かないものである。

おとなは、落ちている木の葉の形や色にしか気が付かない。しかし子どもは、木の葉に全く違ったイメージを感じている。ここでは空中を廻転して舞う木の葉をとり上げたが、もつと全く違った感じ方もあるだろう。おとの観点からそれを分類することを要求し、貼ることを要請したら、子どもは自分のイメージを十分に味わい生きることができなくなってしまう。子どもは、その時、その時のイメージを十分に感じて生きることが、豊かな経験をしてゆくことになるのであると思う。劇あそびでされたように、そこで感じとったイメージを何らかの形で再現するときに、子ども自身でそのことを確実に認識してゆくことができるのであ

つた。最初の感動が十分に生きられなかつたら、そのあとの発展を望むことはできないであろう。

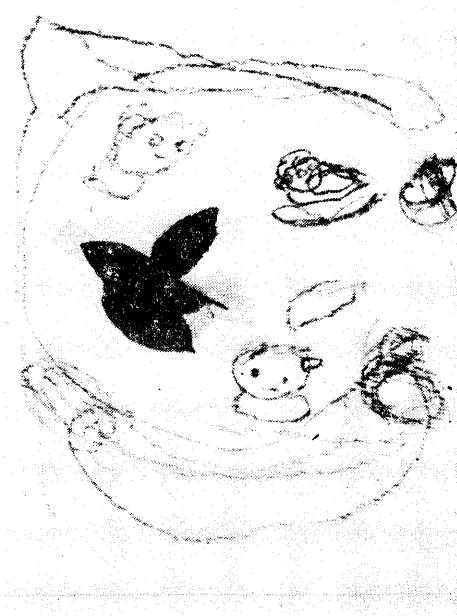
もう少し写真2の描画の説明を加えておきたい。ここには人間が何人も描かれている。Aは丁度同じころ、いろいろの名前の友だちを作りだしてひとりで遊んだ。「ミーコちゃん、ミリコちゃん、ビーリーちゃん、ルリコちゃん、ジャーリーちゃん、ダルちゃん、タミリップ先生、ミルちゃん、クルちゃん、とそいだけで遠足にいくんだ」などと言って、お弁当を作つて出かけるしたくをする。こういうことからみると、この画の中の人間は、風の中を一緒に踊りまわる友だちであるのかもしれない。それから写真2と同じころの別の日に描かれた写真4は、赤色のクレヨンの渦巻きと強くこすりつけた部分、及び緑色の渦巻きの美しい画であるが、紙のへりにはさみで刻みがいれてある。はさみで刻みを入れた部分は、指先であれるとひらひらと動く。これは渦を卷いて動く動きの感覚を出したものであろう。このこつた、この子どもはいろいろの機会に、こうした回転の動きの体験をしていたのではないかと思う。

(ひづく)

▲写真2 四歳零か月

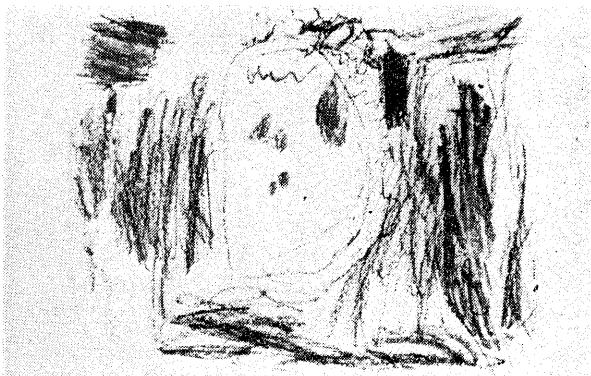
赤いクレヨンの線。

葉は実物を貼つたもの。



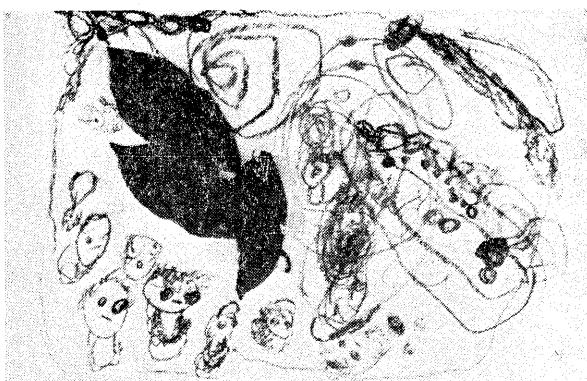
◆写真1 四歳零か月

バック 緑、顔の線 赤、下部には白  
も使われている。クレヨン。赤い線の  
区切りがある。



◆写真4

大部分は赤いクレヨン。  
中央部のうずまきの線は  
一部緑。



◆写真3 四歳零か月

赤いクレヨンの線、オレンジ色のうず  
まき、茶色のうずまき。葉は实物を貼  
つたもの。

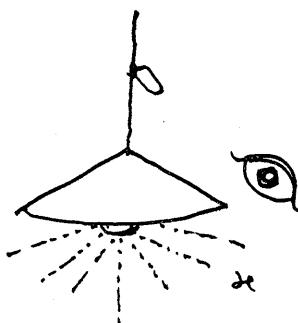


で  
ん  
わ

文と絵 柴岡治子

お母さんは足が悪いから、これから夜のおべんじょには一人で行くようになさいねと言われました。おばさんの幼稚園の頃です。

おばさんはその晩もおべんじょに行きたくなつて目がさめました。昼間のお母さんの言葉を思いだしました。シーツと起きて、急に目がみえなくなつた人のように、壁をつたつておべんじょの前まで行き、何だかちつともこわいと思わないでおしつことをして、また寝室に帰つて寝ました。



ずい分昔のことだつたし、小さな家だつたし、おべんじょには電気はついていませんでした。壁に電気のスイッチなんてなかつた頃のことです。お母さんは眠つていて知らないと思つていましたが、やっぱり気がついていました。そしてびっくりしました。まさかその夜から、おばさんが一人でおべんじょに行くとは思わなかつたのです。

デンキをつけてからとお母さんが言つたかどうか、おばさんは覚えていませんが、お母さんは急いで電気をつける工事をたのみました。

だけどおばさんは、いくら思い出してみても、こわかつたような気持ちを少しも思い出しません。よくおべんじょの前と後をまちがえなかつたし、落っこちななかつたなあと思つたりするだけです。昔のおべんじょは水洗などではなく、深い暗い穴のようでしたから。

どうしておばさんはこわくなかったのかな。

## 日本保育学会第30回大会のお知らせ

期 日 昭和52年5月14日(土)・15日(日)

会 場 聖和女子大学

内 容 (1)研究発表

(2)シンポジウム

- 保育者養成の現状と問題点
- 幼稚園と保育所の一元化問題
- 幼・保・小の関連
- 家庭保育と集団保育
- 障害児保育の問題

(3)日本保育学会創設30年記念講演

日本保育学会会長 山下俊郎

(4)特別講演「アメリカにおける障害児対策と教育」

聖和女子大学 大脇園子

大会に関する連絡先は次のとおりです

〒662 兵庫県西宮市岡田山 7-54 聖和女子大学

日本保育学会第30回大会準備委員会(黒田実郎)

電話 0798(52)0724

幼児の教育 第七十六巻第五号

五月号 ◎ 定価二〇〇円

昭和五十二年四月二十五日 印刷

昭和五十二年五月一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行者 津 守 真

112 東京都文京区大塚三ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

103 東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売  
所フレーベル館にお願いいたします

※万一製品不良本がございましたら、おとりかえいたします。

★★★

# 南十字星に教育の原点を求めて

★★★

日本幼稚園協会・みどり会主催

## 第5回幼児教育オーストラリア視察旅行募集のおしらせ

### ●コーディネーター 津 守 真 (お茶の水女子大教授)

オーストラリア・ニュージーランドの旅行は、私ははじめてです。日本とは比較にならない広大な土地、近代文明の歴史も浅い土地で、人々がどのような考え方をもって生活し、子どもはどのようにして育っているかを見ることは、興味深いところです。幼稚園も、大らかなものがあるのではなかろうかという期待がありますが、実際にはどうでしょうか。まだ日本人があまり訪れていない、未知のことが多い土地なので、行ってみようという気を起した次第です。狭い島国の日本とは違った風物・人・子どもにふれることができのをたのしみにしています。

### ●日程●

東京→シドニー(2泊)→ウェリントン(2泊)→ロトルア(1泊)⇒ワイトモ→オークランド(2泊)→ブリスベン・ゴールドコースト(2泊)→シドニー→東京

### ●期間●

昭和52年8月1日(月)~8月12日(金) (12日間)

### ●募集人員●

40名(申込み順)

### ●参加費用●

¥475,000(ローンの利用もできます)

\*詳細旅行条件等につきましては案内書をご請求下さい。



### ●応募方法●

参加希望の方ははがき(住所・氏名・電話番号・明記)又は、電話にて下記へご連絡下さい。視察旅行案内書と申込書を送付します。

### ●お問い合わせ・申込先●

#### 日本幼稚園協会

〒112 東京都文京区大塚2-1

お茶の水女子大学付属幼稚園

#### みどり会 山村きよ

〒107 東京都港区北青山3-4-21-202

TEL (03) 408-2768

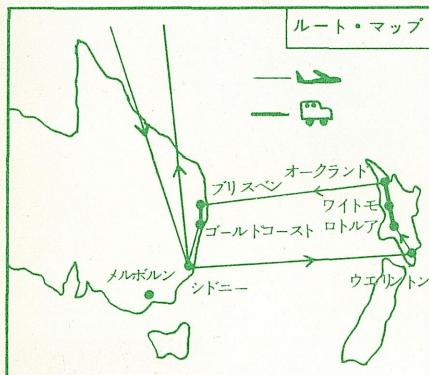
#### 日本交通公社海外旅行新宿支店

〒160 東京都新宿区西新宿1-18-8(スカイビル)

TEL (03) 346-0170(代)

担当: 富田、大山

### ●協力・フレーベル館



### 〈視察先・その他のご案内〉

○視察先については現在、在日オーストラリア、ニュージーランド大使館と打合せ中です。

○視察先プロフィール及び現地教育事情については、7月上旬にセミナーを、旅行内容については6月上旬にオリエンテーションを開催いたします。

○視察団は、今回はお茶の水女子大学教授津守 真先生、みどり会代表山村きよ先生がコーディネートいたします。

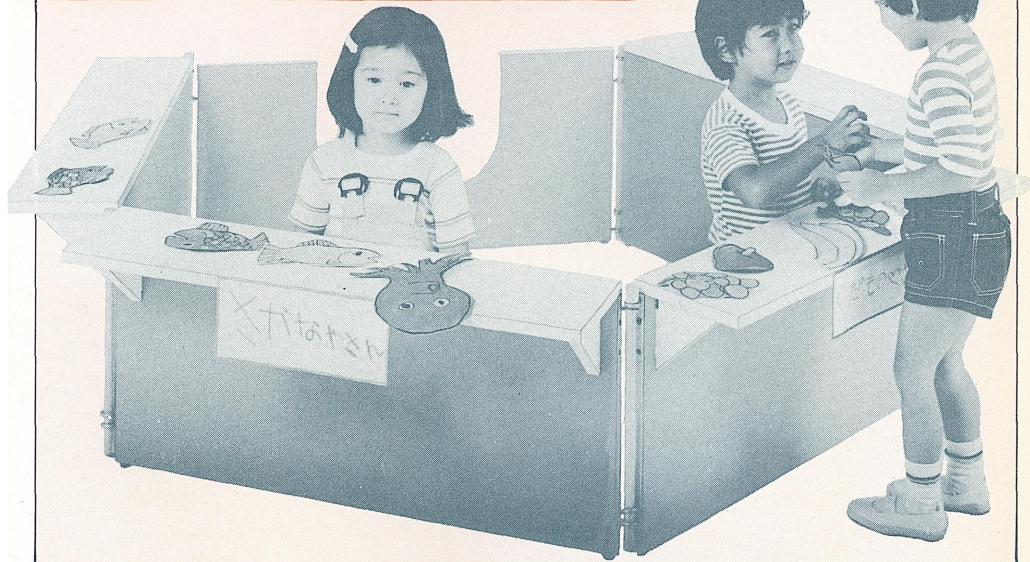
○視察に際しては10人に1人の割合で通訳を準備しますので語学の心配はありません。

○第2回、第3回の視察報告書に残部がございます。ご希望の方には実費頒布します。(¥1,000)

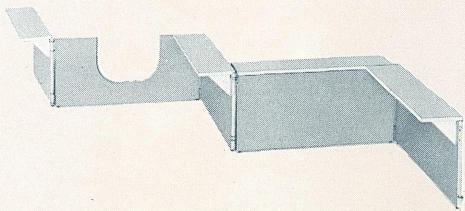
# 楽しい“ごっこ遊び”

（キンダーストアーやプレイサークルと一緒に楽しく遊びましょう。）

ミニストアー 39,500円

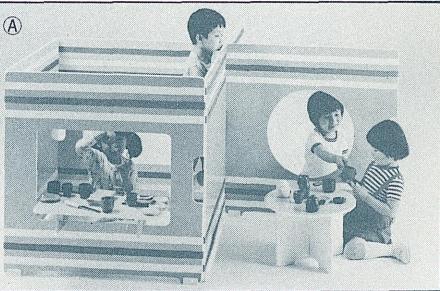
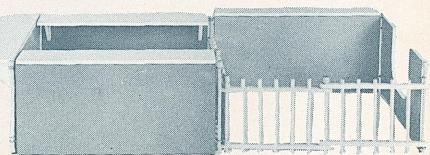


展開例①



○パネル寸法：高さ45cm・幅90cm・厚さ2cm  
○商品内容：棚付パネル 4枚 固定ピン 16本  
フラッシュコアボード  
入口パネル 1枚 連結棒 6本  
棚 受 8枚

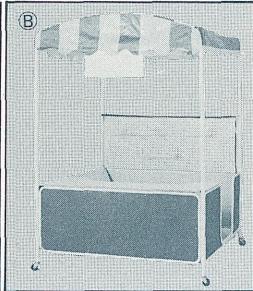
展開例②



Ⓐ プレイサークル

70,000円

パネル寸法  
高さ90cm・幅90cm・厚さ1.2cm



Ⓑ キンダーストアー

65,000円

幅125cm・奥行125cm・高さ186cm

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所・または本社営業課 TEL (03)292-7781(代)にお問い合わせください。

創業70年・キッズブック創刊50年

フレーベル館